

平成28年度 愛媛県PTA連合会 防災活動研修事業

**あふれる愛顔でつながろう
ボランティア活動事業
～ 報告文集 ～**



平成28年8月2日(火)～5日(金)

愛媛県PTA連合会

目 次

防災研修事業を終えて	団 長 橋川 隆至	1
事業の目的と訪問にあたっての心構え		2
日程表		3
参加者名簿		4
各班集合写真		5
活動の様子～写真で振り返る～		6
この3日間を通して	丹原東中学校 秋山 佳祐	10
私が伝えたいこと	三崎中学校 井上明日香	11
防災活動研修事業に行つて	新居浜北中学校 藤田 海夏	12
それでも、前を向いて一生懸命!	愛媛大学教育学部附属中学校 三原 心春	13
東北ボランティアで学んだこと	愛媛大学教育学部附属中学校 花谷 光希	14
命の大切さ	川之江北中学校 福田 航大	15
3泊4日 東北ボランティア活動報告と学んだ事	土居中学校 大野 舞香	16
東北で感じたこと	伊方中学校 林 多花子	17
今、自分にできること	平野中学校 白石 航太	18
毎日のありがたさ	日吉中学校 加藤 稜士	19
命を守る	松前中学校 吉田 真文	20
一番怖いのは記憶の風化	三島南中学校 西原 彩夏	21
私たちの役目	大洲北中学校 東 のどか	22
この研修で改めて気づいたこと	岡田中学校 大西彪太郎	23
東日本大震災から5年被災地陸前高田市について	松山西中学校 山内 凜人	24
記憶をつなぐ	西条東中学校 菊池 凜子	25
ボランティア活動に参加して学んだこと	川東中学校 永易 将大	26
人とつながる	川之江南中学校 宮崎 華	27
あふれる愛顔でつなごうボランティア活動に参加して	宇和中中学校 鎌田 奈実	28
防災ということについて	愛媛大学教育学部附属中学校 辰巳ゆめの	29
地震・津波・原発事故の恐怖	砥部中学校 二宮 寛隆	30
東北に行つて	御荘中学校 井上 空	31
防災活動研修で感じたこと	西条西中学校 伊藤 康将	32
初めての被災地ボランティアに参加して	内子中学校 長渕 嘉音	33
自然災害の恐ろしさについて学んだこと	砥部中学校 阿河 優里	34
防災活動研修事業について	新居浜北中学校 藤田 有城	35
イメージと現実	川内中学校 松崎 桃果	36
感謝	西条北中学校 大道紅実花	37
防災活動研修に参加して	松山南中学校 武田 空	38
東北ボランティア活動に参加して	川東中学校 正田 遥香	40
東日本大震災被災地レポート	松野中学校 友 康士郎	41
復興の現状を見て	椿中学校 本田 麻琳	42
防災活動研修事業を終え	実行委員長 渡邊 誠一	43
防災活動研修事業レポート	引 率 者 行天 雅史	44
防災活動研修事業を経験して	引 率 者 大西 祥一	44
防災活動研修事業について	引 率 者 藤田 優	45
忘れてはいけない!!	引 率 者 高田 智世	45
東北での研修を終えて	引 率 者 井上 香里	46
人「心と伝」	引 率 者 宮崎 恵	46
「つながる」ということ	事務局 原田 幸夫	47
防災意識を高め生命を大切にするPTA活動	事務局 東野 博子	47



防災研修事業を終えて

団 長 橋 川 隆 至

多くの方々のご賛同とご協力・ご支援を得て、東日本地域において30名強の中学生と共に3泊4日の研修事業を無事に終えることができました。8月2日～5日までという暑い時期での研修でしたが、子供たち全員に大きな事故・トラブルもなく、無事に保護者の方々の元へお届けできたことで、1つ大きな責任を果たせたと感じているところです。

今回の研修事業は、岩手（陸前高田/中尊寺）・宮城（閑上）・福島（南相馬）の3県に渡って現地を訪問し、子供たちの目で被災地の現状を確認してもらい、そして現地の方々と交流することで、自分の目で見て、耳で聞き、心で感じて、子供たちの感性で被災地の現状を理解してもらうことを第一の目的としました。その際の引率者の役割としては、極力大人の目線を通しての問いかけはせずに静かに見守ることで、子供たち自身で被災地の現状を感じ取ってもらうことを優先させることとしました。

また訪問した東日本の同学年の子供たちがどのような学校生活を送っているかを見聞きし、交流することで、今は何もできなくても次につながる何かを感じ取って、少しでも被災地の子供たちの将来につながるものを子供たちの心の中から生まれてくれることも期待していました。

3泊4日という限られた時間の中で、研修を熟すには子供たちにとって、とてもハードだったと思います。初日はまだ緊張感が抜けきらない中で、松山から仙台まで移動し、事前学習における各自・各グループの研修目的の確立により子供たちの緊張もほぐれ、目的に向かう決意とやる気を感じられてきました。そして2日目の訪問地である閑上と陸前高田での講演会、3日目の陸前高田での各所訪問ならびに荘厳な中尊寺訪問、4日目の南相馬で鹿島中学校訪問と時間が経つたびに疲労度は増していましたが、子供たちの目の輝きが逆に増して態度は大きく変わってきたと感じました。これは幾度となくこのような研修の中で毎回感じさせられることで、大人である我々が考える以上に子供たちは感じ・悩み・考え、自分たちで何らかの答えを得ようと頑張っています。それによって今までと違った一面を示してくれたり、大きくステップアップをするような成長を見せてくれました。今回もまったく同様でした。大人が枠を決めて、型に嵌めてしまうとそれ以上の成長を阻んでいるように感じ、自分で感じるものから子供たちの自由な発想の基で何かを見つけ出そうとすることで、大人の想像を超えた考えに辿り着いたり、想像もしない成長を見せてくれました。

今回の研修事業はまだ被災地に行って帰ってきたというだけですが、是非ともこれを次につながる事業にしていくことが重要と考えており、それが我々に課せられた命題と考えています。子供たちは大きな成長を見せてくれています。その成長はまだまだ若木です。これから成長して大きな幹、大木になり、地に深く・広く根を張る可能性が十分にあります。子供たちには愛媛県が発信となる活動を是非とも自分たちで創造し、多くの仲間と共に自分たちの行動目標を立てて、将来に地域だけでなく、より大きなフィールドで活躍できるように、自己研鑽し、大きく成長することを期待するとともに楽しみにしています。

そのために我々大人は子供たちの成長環境が阻害されないように、時には盾となり、方向性を示したり、後方より支援したり、また成長の場が期待できるよう機会・場所を設けたりいかなければならいと強く感じます。今回の子供たちは愛媛県にとってとてつもない価値を持った原石だと思います。それ磨いて光り輝く宝石にするかは子供たち自身によるところが大ですが、その価値ある原石であることを子供たちに気づかせてあげるのは大人であり、切磋琢磨できる場を適宜提供するのも大人の責任であると、今回の子供たちを見て感じさせられました。

最後になりますが、今回の事業に当たりご後援を頂い愛媛県教育委員会、小中学校長会に感謝致します。今回の事業の主旨をご理解いただき多額の補助金を提供していただいた日本PTA協議会にも感謝致します。また研修事業に参加してもらったスタッフの方々には改めてご協力に感謝するとともにご苦勞様でした。最後になりますが、この事業の主旨をご理解していただいて大切な子供たちを参加させていただいた保護者の方々の決意に敬意を表しますとともに、本当にご協力していただきありがとうございました。

愛媛県PTA連合会 防災活動研修事業の目的

本事業に参加する皆さん。東日本大震災が発生してから、5年が経ちました。

私たちは、被災地の現状をどれだけ把握しているでしょうか？

時間の経過とともにメディア等からの情報も少なくなり、私たち自身の記憶も関心も薄れてきているのではないのでしょうか？

今回の事業では、まず、皆さんの「目で、耳で、肌で、心で」、被災地の現状を感じ取ってほしいと思っています。皆さんが何を感じ取り、そこから、何ができるか、考えましょう。

そして、被災地の中学生や住民の方々と活動をとともにし、互いの思いを交流しましょう。「支援する側」「支援される側」という単純な関係ではなく、互いが置かれている立場に「共感」「理解」しながら生きていくために必要なことを考えましょう。

最後に、今回の事業で得た思いや知識を、愛媛県内の小中学生に伝えてほしいです。参加できなかった皆さんと被災地の中学生との橋渡し役になってほしいと考えています。

参加者全員が、「あふれる^{えがお}愛顔」で被災地の皆さんと「つながって」いきましょう。

- 東日本大震災の被害の様子と復興の現状を直接感じ取ることで、自分たちができることを考える機会とする。
- 被災地の中学生や住民の方と一緒に過ごして交流を深めることで、被災地の人々と共感しながら生きていくための資質や能力を育成する。
- 今回の事業で得た思いや知識を愛媛県内の小中学生と分かち合うことで、被災地の中学生と県内小中学生との橋渡し役を担う。

訪問にあたっての心構え

震災から5年が経ち、復興が進んでいるところもありますが、まだまだ手つかずのところもあります。それは、“人の心”も同じです。今回の事業はボランティア活動ですので、遊び感覚の行動は絶対にしないでください。参加者全員で協力し、素晴らしい成果を上げるために、次のことを約束してください。

- 「はい」という素直な心
- 「こんにちは」という親しみの心
- 「ありがとうございます」という感謝の心
- 「私がやります」という積極的な心
- 「すみません」という反省の心

日 程 表

	月 日	時 間	内 容	備 考
1日目	8月2日 (火)	11:00 11:30 13:05 16:10 16:30 17:20	受付開始 結団式 松山空港発（伊丹空港経由） 仙台空港着 仙台空港発 ホテル着（夕食後、学習会）	松山空港2階団体待合室 飛行機 貸切バス 宿泊地（仙台市）
2日目	8月3日 (水)	8:10 9:00 10:00 13:00 17:00 17:30	ホテル発 名取市着 ・「関上の記憶」館内見学 ・案内人による関上の街見学 名取市発（移動中に昼食） 陸前高田市着 ・復興現場最前線視察 ・地元の銘菓「ゆべし」作り体験 ・戸羽市長さんからの講話 陸前高田市発 ホテル着（夕食後、学習会）	貸切バス 宿泊地（気仙沼市） ※元・気仙小学校長先生からの講話
3日目	8月4日 (木)	8:00 8:30 9:30 11:30 12:00 13:30 15:00 16:30 18:00	ホテル発 「奇跡の一本松」見学 米崎中学校仮設住宅着 ・自治会長さんからのお話し ・交流会 他 米崎中学校仮設住宅発 シャークミュージアム着 ・各班で昼食・休憩 シャークミュージアム発 平泉町着 ・中尊寺見学と復興祈願 他 平泉町発 ホテル着（夕食後、報告会）	貸切バス 宿泊地（仙台市）
4日目	8月5日 (金)	8:00 9:30 10:30 12:00 13:05 16:35 17:00	ホテル発 南相馬市着 ・鹿島中学校訪問 他 南相馬市発 仙台空港着 仙台空港発（伊丹空港経由・機内で昼食） 松山空港着 解団式・解散	貸切バス 飛行機 松山空港2階団体待合室

参加者名簿

【生徒】

	学 校	氏 名		学 校	氏 名
1	丹原東中3年	あき やま けい すけ 秋 山 佳 祐	17	川東中2年	なが やす しょう だい 永 易 将 大
2	三崎中3年	いの うえ あ す か 井 上 明日香	18	川之江南中1年	みや ざき はな 宮 崎 華
3	新居浜北中2年	ふじ た み なつ 藤 田 海 夏	19	宇和中3年	かま た な み 鎌 田 奈 実
4	附属中1年	み はら こ はる 三 原 心 春	20	附属中1年	たつ み ゆめ の 辰 巳 ゆめの
5	附属中1年	はな たに こう き 花 谷 光 希	21	砥部中2年	にの みや ひろ たか 二 宮 寛 隆
6	川之江北中1年	ふく た こう だい 福 田 航 大	22	御莊中1年	いの うえ そら 井 上 空
7	土居中2年	おお の まい か 大 野 舞 香	23	西条西中2年	い どう やす まさ 伊 藤 康 将
8	伊方中3年	はやし たか こ 林 多花子	24	内子中3年	なが ふち か のん 長 洲 嘉 音
9	平野中1年	しら いし こう た 白 石 航 太	25	砥部中2年	あ が ゆう り 阿 河 優 里
10	日吉中3年	か どう りょう じ 加 藤 稜 士	26	新居浜北中1年	ふじ た ゆう き 藤 田 有 城
11	松前中2年	よし た ま ふみ 吉 田 真 文	27	川内中3年	まつ ざき もも か 松 崎 桃 果
12	三島南中3年	にし はら あや か 西 原 彩 夏	28	西条北中3年	だい どう く み か 大 道 紅実花
13	大洲北中2年	ひがし の ど か 東 のどか	29	松山南中2年	たけ た つばさ 武 田 空
14	岡田中3年	おお にし こうたろう 大 西 彪太郎	30	川東中1年	しょう た はる か 正 田 遥 香
15	松山西中1年	やま うち りん と 山 内 凜 人	31	松野中2年	とも こうしろう 友 康士郎
16	西条東中2年	きく ち り こ 菊 池 凜 子	32	椿中1年	ほん た ま りん 本 田 麻 琳

【引率者】

	学 校	氏 名		役 職	氏 名
1	団 長	はし がわ たか し 橋 川 隆 至	7	引 率 者	いの うえ か お り 井 上 香 里
2	実 行 委 員 長	わた なべ せい いち 渡 邊 誠 一	8	引 率 者	みや ざき めくみ 宮 崎 恵
3	引 率 者	ぎょう てん まさ し 行 天 雅 史	9	看 護 師	むら かみ あい 村 上 愛
4	引 率 者	おお にし よし かず 大 西 祥 一	10	添 乗 員	ほし がわ じゅん 星 川 潤
5	引 率 者	ふじ た まさる 藤 田 優	11	事 務 局	はら た ゆき お 原 田 幸 夫
6	引 率 者	たか た ち せ 高 田 智 世	12	事 務 局	ひがし の ひろ こ 東 野 博 子

各班集合写真



1 班
秋山 佳祐／井上明日香／藤田 海夏
三原 心春／花谷 光希／福田 航大



2 班
大野 舞香／林 多花子／白石 航太
加藤 稜士／吉田 真文



3 班
西原 彩夏／東 のどか／大西彪太郎
山内 凜人／菊池 凜子



4 班
永易 将大／宮崎 華／鎌田 奈実
辰巳ゆめの／二宮 寛隆／井上 空



5 班
伊藤 康将／長渕 嘉音／阿河 優里
藤田 有城／松崎 桃果



6 班
大道紅実花／武田 空／正田 遥香
友 康士郎／本田 麻琳

活動の様子 ～写真で振り返る～

1日目



結団式
「松山空港にて」



結団式
「保護者に見送られて」



仙台空港着
「長旅、お疲れ様！」



仙台空港
「津波浸水深の標示」



学習会
「アイスブレイキング」



学習会
「表情も和らいで…」



学習会
「大震災について」



学習会
「自分の考えや思いを」

2日目



関上
「日和山」



関上
「山頂から」



関上
「小齋館長の説明」



復興現場
「現場の方の説明」



復興現場
「防潮堤の内側は・・・」



復興現場
「思いを新たに」



ゆべし
「班で協力して」



ゆべし
「和の心を」



ゆべし
「伝統を引き継ぐ」



市長講話
「戸羽市長の講話」



市長講話
「真剣な眼差しで」



市長講話
「未来に向かって」



気仙小校長講話
「菅野先生の講話」



気仙小校長講話
「真剣だからこそその質問」



気仙小校長講話
「思いを引き継ぎます」

3 日 目



一本松
「大地に力強く」



仮設住宅訪問
「自治会の方々と」



仮設住宅訪問
「聞くだけでなく…」



仮設住宅訪問
「メモをとりながら」



仮設住宅訪問
「逆に元気をもらいました」



仮設住宅訪問
「運動場に仮設住宅が…」



中尊寺見学
「復興祈願」



中尊寺見学
「夏草や兵どもが夢の跡」



報告会準備
「これまでの振り返って」



報告会準備
「疲れてはいるけれど」



報告会準備
「班で協力して」



報告会
「みんなの思いを」



報告会
「字に表して」



報告会
「言葉にして」

4日目



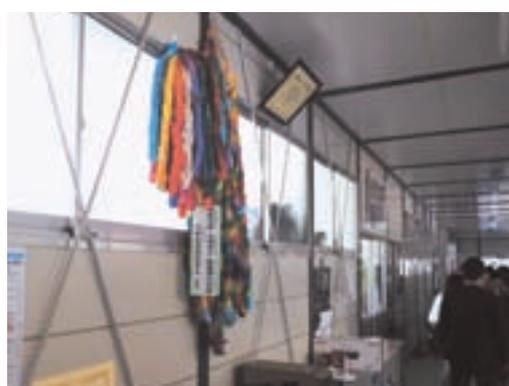
鹿島中訪問
「学ぶ大切」



鹿島中訪問
「4小学校合同校舎」



鹿島中訪問
「仮設体育館」



鹿島中訪問
「支える仲間が・・・」



鹿島中訪問
「放射能測定器」



解団式
「団長から」



解団式
「感想発表」



解団式
「全員にありがとう」



この3日間を通して

西条市立丹原東中学校 3年 秋山佳祐

僕は、今回のボランティア視察を通して、自分が想像していたこととは大きく違う「被災地の今」を知ることができました。まず驚いたことは、被災地の復興の進み具合です。震災から5年という月日が経過しています。僕は、そのとき小学4年生でした。その日は「お別れ遠足」で、遠足から帰り、テレビをつけて震災があったことを知りました。今、自分は中3になっていて、僕にも5年という時間が流れました。僕はこの5年間で被災地の復興は、もっと進んでいるものだと思っていました。しかし、実際は、多くの人たちが以前の生活に戻れず、被災当時と同じように仮設住宅で暮らしているのです。確かに、震災当時山積みになっていたたくさんの漂流物は撤去され、道路などの交通機関の一部は整備されていました。ここまで復旧するのも大変だったと思いました。

仙台に到着した僕たちは、まず、沿岸部にほど近い所にある閑上という場所を訪れました。そこで「閑上の記憶」館の館長さんの話を聞きました。閑上は、何十年かに一度、大規模な地震や津波などが発生している所です。しかし、閑上の人たちは、これほどまでの大規模な地震が起こると思っていませんでした。今回閑上をおそった津波は、7～8メートルのものです。「津波がいずれくるとわかっていたのに、何の対策もなされていなかった」といった言葉が強く印象に残っています。

米崎中学校仮設住宅の人たちとも交流しました。僕は、「今、困っていることやして欲しいことは何ですか」と質問しました。すると、一人のお年寄りが、「困っていることはない」と答えてくれました。そして、「困っていることは特にないけど、親族たちが泊まりに来たときに寝る場所がないので、空き家になっている仮設住宅をその日だけでもいいので貸して欲しい」と話してくれました。僕は、そのお年寄りから、もっともっとたくさんの困っていることや要望が出てくるものだと思っていたので、その答えに驚きました。5年という時間の中で、被災された人達は、現状を受け入れようと一生懸命努力をしてきたのだと思いました。そして、最後に「自分の命は、自分で守る」と言ってくれました。誰かがどうにかして助けてくれるという僕の考えでは、絶対に命は助からないのです。

この3日間で僕は、全部ではないけど、被災地の今や自然災害の恐ろしさを知ることができました。愛媛に帰って、僕は、まず家族に、自分が経験したことや知ったことを話しました。僕の家族は、いざというときの避難先を決めました。被災したときに必要な道具も買いそろえることにしました。僕は、友達にも今回の体験を話したいと思います。僕が話したことが、人から人へと伝わり、一人でも多くの人が地震について少しでも深く知ることで、実際に地震が起きたときに何かの助けになっていくと思うからです。

僕たちが住む愛媛にも、南海トラフ地震が起こると言われています。どんな恐ろしいことが起こるかはわかりませんが、それが起こる前に、自分たちができることを一つでもたくさんしていきたいと思っています。

今回体験できたことを、そして、東日本大震災という恐ろしい出来事が実際に起こった出来事なんだということを、決して忘れずにいたいです。





私が伝えたいこと

伊方町立三崎中学校 3年 井上 明日香

私は、「あふれる愛顔でつなごうボランティア活動事業」に参加して、予想以上の現実を知り、これからの生活を考えるきっかけになり本当に良かったと思います。

私は、この活動の参加募集を学校で配られた時「絶対に参加したい!」と思いました。抽選の結果行けることになった時、とてもうれしく、参加できない友達の分もしっかり勉強してこようと思いました。

出発の日、全く知らない人達と空港で会い友達ができるか、4日間一緒に活動できるかという不安を感じながら結団式が始まりました。そこで自己紹介や抱負の発表があり、だんだん不安が楽しみに変わっていき飛行機に乗り込みました。仙台市に到着した夜、学習会で東日本大震災のことについて詳しく説明がありました。改めて震災の恐ろしさを感じました。

2日目は、名取市の「閑上の記憶」という資料館に行きました。館内には小学生がねんど作成した震災前の街並が飾られていました。建物の外には中学生の慰霊碑がありました。この2011年3月11日は、閑上中学校の卒業式でした。閑上中学校では、1年生4人2年生7人、3年生3人が亡くなりました。3年生3人にとっては、一生に一度の卒業式が命日となってしまったのです。この慰霊碑の前には野球のベースが置かれています。亡くなった野球部のエースのために部員がもってきてくれたそうです。名取市は「堤防があるから津波が来ても大丈夫」と言われていたそうです。でも実際には大きな津波に町が襲われてしまいました。今、私が住んでいる三崎地区にも堤防が作られています。だからといって100%津波から守られるということはありません。堤防があるから大丈夫と思わず、必ず安全な場所へ非難しなければいけないと思いました。

陸前高田市の市長さんに、とても貴重な話をしてもらいました。市長さんもこの地震で奥さんを亡くしてしまったそうです。市長さんが言われた「どんなに専門家の人達等が大丈夫、ここには地震はこない、と言われても自然災害はおこるものなのでしっかりと備えておくことが大事」という言葉が心に残っています。元気仙小学校の校長先生の講話もありました。

「あたりまえがあたりまえじゃない。」

という言葉がとても印象に残りました。私は、この言葉を何度もいろいろなところで聞いたことはあります。住む場所がある、家族がいる、食べる物がある、ということあたりまえだと思っている自分がいました。でも、話を聞いて改めて、私達が今生活できていることは、あたりまえじゃないということを知ることができました。

3日目は、仮設住宅を訪問したり、中尊寺の見学に行きました。

仮設住宅に住んでいるお年寄りと交流会があり、たくさん質問をし、実際に地震を経験した人に答えてもらいました。私が話したおばあちゃんが何度も繰り返して「揺れがおさまったらとにかく逃げる、1回逃げたら絶対戻らない」と言っていました。

あの奇跡の一本松も見に行きました。奇跡の一本松の後ろには、ゆすホテルがあり、崩壊したままの状態で見残されていました。地震の怖さを一番感じた瞬間でした。

この研修に参加して、崩壊した建物を見たり、地震を体験した方々から直接話を聞くことができ、とても貴重な体験をすることができました。地震や津波が起こることは怖いですが、起こった時のための備えと、どう非難するかを知ったことで不安が少し軽くなりました。私が自分の目で見て学んだことを周りの人達に伝えていきたいです。





防災活動研修事業に行って

新居浜市立北中学校 2年 藤田海夏

私が、この活動に参加した理由は、東日本大震災から5年経った今、どのくらい復興が進んでいるのか、また、今の私達は何を知っていて、何を知らないのか、そして、私達に何ができるか、考えるためです。

頭の中では、こう考えながらも、心のどこかで軽く考えていました。『もう5年も経ったんだ。』『そんなに厳しくないだろう。』という考えもあったと思います。しかし、私の考えは甘かったです。本当に驚きました。

まず1日目、この日は飛行機とバスで向こうのホテルに行きました。その日は、メンバーとも初顔合わせで、隣の人も初対面でした。話しづらくて、他の人は楽しそうだし、「もうイヤだな…」と少し感じていましたが、生まれて初めての飛行機だったし「どうでいいか。」と思うようになりました。

1日目は震災の状況を「学習会」で学びました。「東日本大震災が2011年3月11日にあった。」「大きかった。」ということしか知りませんでした。本当は2011年3月11日午後2時46分18秒にあったそうです。

「活動記録」のページの感想に、「実際に地震にあった方々は、ほんの10秒、数分前まで何を考えていたんだろうとか、色々考えました。」と書いていました。きっと10秒、1秒前まで同じ日常生活で、「今から何しよう。」とか考えていたんだと思います。仕事や学校の人もいます。もし南海トラフが来たとき、自分は何を考えるだろう…とも思いました。

つらかったのが、小さな子供がお母さんに手紙を書いている写真があって、そこには「ままいきてるといいね」と書いていました。自分の母親の生死もわからず、あんな手紙を書いていると思うと心が痛みました。

1日目の学習会の最後の方で、「災害で、日本は強くなった。日本は優しくなった。」と教えてもらいました。それを聞いて、今までの自分がすごく小さいものを感じました。

2日目の活動では、3人の方々のお話を聞きました。閑上の街のことについてと、復興現場の視察、陸前高田市市長の戸羽さんからの講話です。それと、「ゆべし」作りも体験しました。

閑上地区ではその日、卒業式でした。しかし、東日本大震災があって14人の卒業生が亡くなりました。右の写真は、亡くなった方々の名前があり、ジュースなどをおいています。また、小学校ではこの震災で被害者（死者）を1人もだしていない学校があります。その学校では、逃げるときに高学年の子を前にしたことで、モタモタせずにげられたそうです。



右の写真は、復興現場の様子です。私は、ここが1番驚きました。最初に書いたように、私の考えは甘かったです。その辺の土地をうまくもってきたらすぐおわるだろうとか、そんな考えでした。はっきり言って、恥ずかしいです。こっちの人の苦労をめちゃくちゃ簡単に考えていました。

すべての活動をまとめると、みんな「命を大切にしてほしい。」と言っていました。『かんたんに、「死ね」という言葉を使ってほしくない。』と言われたとき、自分は使っていた…と思い出し、2度と使わないと思いました。



そして、学校に行けるのも部活ができるのも親が何か言ってくれるのも寝る場所や食べ物があることも、全てが当たり前ではありません。そのことができるのはとても幸せだと思いました。

そして、この活動で1つ1つのことにありがたみが感じられるようになりました。



それでも、前を向いて一生懸命！

愛媛大学教育学部附属中学校 1年 三原心春

震災が起こった時、私は小学1年生で正直その時のことはあまり覚えていません。ただ何度も何度もテレビで津波の映像が流れていて怖かったのは覚えています。

あれから5年。私は今中学1年生です。5年たった被災地は一体どんな風になっているのだろうか。復興は進んでいるのか。そこに暮らす人達は元気なのか。期待と不安の中、東北へとむかいました。飛行機から、着陸する間際海が見えました。その日私が見た海はとても静かでおだやかでした。5年前の震災の日、親しんできたこの海が突然姿を変えて襲ってきたかと思うと、とても恐ろしい気がしました。

被災地に実際行ってみると、何もなかったようにすっかりきれいになっている場所もあれば、あたり一体の家が全て流されて土の土台だけが残ってしまっていてそのままになっている場所も多くありました。復興の進み具合がバラバラのように感じました。

驚いたことは5年たった今でも仮設住宅で暮らしている方がとても多いということです。陸前高田市でも名取市でも以前よりは減っていますが、まだまだ多くの方が暮らしています。その中には私と同じ中学生も大勢いて、この5年間不自由な思いをしながら仮設住宅から学校へ通い勉強をしているのかと思うと、本当にすごいなと思いました。また南相馬市では放射線の被害がまだまだ残っていて、帰宅できる地域は広がっているけれどその土地で収穫した野菜やお米は食べられないままです。また常にマスクをして生活したり、他県に出れば南相馬市というだけで変な目で見られたりすることもあるそうです。どの県でも、震災前とは比べものにならないほど大変な暮らしをされている方がたくさんいることを知りました。

そんな中、一番心に残ったのは震災当時気仙小学校の校長をされていた菅野さんの言葉でした。「悲しくて下を向いているだけじゃ進まない。ちゃんと前を向いて今を一生懸命生きよう。」この言葉にはたくさんの方が亡くなって悲しいことばかりだけど、くよくよしていても何も進まない。悲しい時こそ前を向いて今を一生懸命生きる。すると人生も明るくなり幸せもついてくるのだ、という意味が込められているそうです。

被災地に行ってみて、復興はまだまだにもかわからず、思っていた以上に被災者の方達が笑顔で一生懸命に感じました。きっとそれは菅野さんのようにつらくても前を向こう、立ち上がろうとする人々のパワーだと思います。私も元気をもらい、もっと東北を応援したくなりました。

被災地に行くと心に決めたことが2つあります。1つ目は、あたりまえの生活に感謝すること。家に帰れば家族がいる、ご飯がある。そんな当たり前のことがどんなにありがたいことか。元気に学校へ通えることがどんなに幸せなことか。あたりまえの生活が送れることがどれだけ幸せか忘れてはいけないと思います。

2つ目は、命を大切にすること。震災ではたくさんの中学生も犠牲になりました。生きたくても生きられなかった命がたくさんあります。生きたかった中学生の為にも私達は命を大切にしなければいけません。人の命を傷つけてはいけなし、自分の命も粗末にはしてはいけません。被災地に行ったおかげでいろんなことを感じる事ができました。これからは、1日1日の重さを感じ、大切に一生懸命生きたいと思います。

この活動に参加していろいろなことを学び感じる事ができました。この貴重な体験を今後には生かせるよう頑張りたいです！ありがとうございました！！





東北ボランティアで学んだこと

愛媛大学教育学部附属中学校 1年 花谷 光 希

2011年3月11日午後2時46分、仙台市の太平洋沖を震源とする東日本大震災が起こりました。発生当時は観測史上最大の日本付近で起きた大地震でした。この大地震・津波ではマグニチュード9、震度6～7を観測する大規模なものでした。

また、東日本大震災の全国での被害は、死者1万4,517人、行方不明者1万1,432人、負傷者5,314人、建物被害は7万6,800戸と凄まじい威力でした。

僕は、この夏季休業中に東日本大震災被災地を訪ねました。そこでは、仮設住宅に住んでいる方々の話を聞いたり、資料館などに行ったりして、被災地の現状を学ぶことができました。

この震災は、主に津波による被害が大きかったそうです。津波にたくさんの人が巻き込まれた理由として、ほとんどが逃げなかった、避難中だったという点です。また巻き込まれた場所としては、住宅や路が半分以上を占めています。

1日目の仙台空港に到着した際、早速ここでも震災の記録が残されていました。空港を出たすぐ外壁に、どこまで津波が来たかを表す板が貼られていました。その高さは、大人2人分位でした。そこまで来たと想像すると、人も車も何もかも飲み込まれてしまうと言うことがよく分かりました。その日の夜には、このボランティアに参加した人達と事前学習会を行い、避難途中の方が撮影した動画を見ました。そこでは、四方から津波より少し勢いが小さい波が来ている場面でした。その場面では、色々な場所にたくさんの人が逃げていました。しかし、そのほとんどの人は避難中に津波に巻き込まれて亡くなってしまったそうです。このように、津波の被害がほとんどの東日本大震災は、皆が予想だにしない程の波が来たので、死者や行方不明者が多く出たらしいです。

2日目は、元・気仙小学校長の話を聞きました。気仙小学校は「奇跡の気仙小学校」と呼ばれています。理由は生徒が誰ひとり亡くなっていないからです。それは、当時の校長先生が、地震発生その時、とっさに高台に逃げるという判断をしたためだったからです。しかし、気仙小学校は、震災が起きた時の避難場所になっていたため、市や町から逃げてきた人達や避難途中の人たちは犠牲になってしまいました。また、避難に追いつき、高台には逃げたけど低体温症などで亡くなってしまった人もいます。しかしその後は小学校の校舎、また、その周辺や、グラウンドを整備し、どんどんと学校を元気にしていき、さらには運動会もすぐに始めたそうです。校長先生は、「今を一生懸命に生きて、1日1日を大切にしてください。」と言っていました。

3日目には陸前高田市の米崎中学校仮設住宅を訪問しました。そこでは仮設住宅の自治会長さんや、住民の方々から話を聞きました。その仮設住宅は、20歳未満の人が12人、20～64歳の人が69人、65歳以上の人が58人、計139人の人が住んでいます。また、普通の町と同じように、会議をしたり、ラジオ体操をしたりしています。それに仮設の部屋を利用して、バーや喫茶店、居酒屋などに使っています。個別での会話では仮設住宅の環境について話してくれました。仮設住宅は隣の部屋でスーパーの袋を少し触っただけでも自分の部屋に聞こえてくるそうです。また、夜遅くには、隣の部屋の騒音になるため、あまり風呂にも入れないそうです。このような生活をしていることにすごく驚きました。

4日目には、福島県南相馬市の鹿島中学校を訪問しました。その鹿島中学校のグラウンドの隣に仮設の校舎を建て、近隣の小学校4校の子どもたちが合同でその校舎で授業を受けていました。すごく全体的に簡易な作りだったのでとても衝撃を受けました。

このような仮設住宅や仮設の学校で生活をしている人達は、不安な生活を送っています。しかし米崎中学校の仮設住宅に住んでいる人たちは、明るく元気に「陸前高田音頭」という踊りで迎えてくれました。家が津波で流されてしまった人でも、新たな生活を始められていることはとても素晴らしいことだと思います。充実した衣食住とプライバシーが守られた生活が、1日でも早く送れるようになることを祈っています。

その祈りをささげるために、中尊寺に行きました。

その中尊寺では、珍しく一字金輪佛頂尊という仏様が開帳されていました。その仏様は、東日本大震災や熊本地震の被災地復興を祈願し開帳されたそうです。また、仏様の全身が出ていない理由もお坊さんは言っていました。その理由としては、太陽から仏様が少しだけ出てきている様子を表わしているからだそうです。それはとても人々の不安を取り除き、心に安心を与えてくれる神々しい様子でした。その後は、金色堂を見に行きました。そこでは奥州藤原氏の栄華がとてもよく分かりました。その中尊寺でささげた祈りが被災地の方々に届いていて欲しいです。

僕も、生きていることに感謝して、自分はもちろん、あらゆる命を大切にしていきたいです。



命の大切さ

四国中央市立川之江北中学校 1年 福田航大



ぼくは、東北に行く時、復興は、もっと進んでいるなと思いました。ですが、家は全然建っていませんでした。あと少しで5年が経ちます。

ぼくの予想では、あと5年ぐらいで家が建ってくると思いました。

ぼくは、東北に行って、いろいろなことを学びました。それは3つあります。

1つ目は友達と仲良くなれたことです。最初は、めちゃくちゃ不安で友達ができるかなと思っていたけれど、2日目に入って、とても仲良くなれました。東北でちがう学校で、しかも、ちがう学年の友達と仲良くできて、とても、うれしかったです。

2つ目は、陸前高田市の伝統の和菓子のゆべしを作りました。ピンク色でツバキの形でした。作るのは難しかったけど、とても、おいしかったです。大好きな抹茶も飲めたので、うれしかったです。

3つ目は、陸前高田市長の戸羽市長さんから話を聞いたことにとっても感動したことです。ぼくは、戸羽市長さんの話を聞いて、一番感動したことは、「だれでも命は一つ、命は大切な宝物」と言ったことにとっても感動しました。戸羽市長さんが、津波が来た場合、もっと高い所へ、もっと高い所へにげると言うことを教えてくれました。もしかしたら、生きている間に南海トラフ大地震が来るかもしれないので備えておきたいなと思いました。

最後に、ぼくは、東北に行って、一番心に残ったことは、命を大切にすることです。ほかに、津波が来た場合、もっと高い所へ、もっと高い所へ、にげることも教わりました。仮設の学校にも行って、大変な思いをしていることがわかりました。写真も、いろいろ、とりました。帰って、いろいろなことを家族にいいました。いろいろなことを聞いてくれました。これからは、命の大切さをみんなに広げていけたらいいと思います。





3泊4日 東北ボランティア活動報告と学んだ事

四国中央市立土居中学校 2年 大野舞香

8月2日～5日にかけて、宮城県・岩手県・福島県でボランティア活動に参加しました！私が、今回この活動に参加した理由は、テレビで見るだけでなく、実際に自分の目で現地の様子などを詳しく知りたいと思ったし現地の人の声も直接聞きたかったからです。

【1日目】

一緒に参加する愛媛県内の中学生31名と松山空港にて結団式をしました。そこで一人ずつ抱負を言いましたが、全員が真剣に言っているのを見て、私もこれから頑張ろうという気持ちが更に高まりました。夜は、班のみんなと津波の事について、知っている事を話し合ったり、実行委員長さんから説明を聞いたりして、現地の現状等も少し知れました。

【2日目】

日和山に行きました。頂上から見る景色は、家もなく殺風景で、どこか寂しかったです……。お話を聞くとこの山の上にも津波が来ている事が分かり、怖い思いをしたし、苦しい思いをされたんだなと思いました。また、9メートルの津波が来た所もあると聞き、驚きました。私が、聞いていて辛いと思ったのが自分達と同じ中学生14人が津波にのみこまれ亡くなったと言っていたことです。それに、中学3年生が卒業式だという事でした。犠牲になった3年生は3人でした。これほど辛いことはないと感じました。戸羽市長さんから話を聞いて、津波が来たときは考えるより先に逃げる事が大事と教わりました。一度避難すると、荷物を取りに戻ったりは決してしてはいけません。宮城県の伝統のお菓子で『ゆべし』作りをさせていただきました。地元の方と一緒に作れている経験ができました。ホテルに帰ってその日の事を振り返ってみると、「私たちは生かされているんだな」と思ったし話し合いのなかで皆からも同じ意見が出ていました。

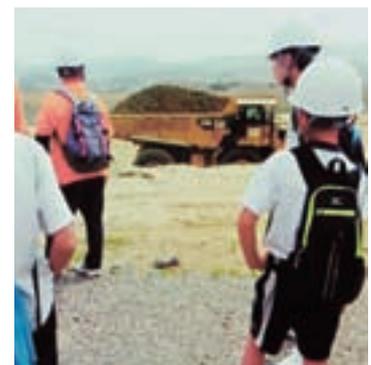
【3日目】

特別に復興現場に行ける事になりました。現地では朝から約10時間程働いていると聞き、皆の為にすごく頑張っているんだなと思いました。早く完成したらいいなと心から思いました。私は、仮設住宅に伺ったこの日が一番心に残りました。私の座っている隣の席のおばあちゃんに話を聞くと津波が来たとき「怖くて体が動かなかった。」と聞いて、本当に苦しい思いをしたんだなと思いました。それに、「まさかこんな津波が来るとは」と言っていて確かに誰も予測してないのに急に来るなんてビックリしたと思います。また、津波が来たとき街から泥水がわきあがったそうです…。『液状化現象』というそうです。こういう話を聞くと被害にあった人は、海が嫌いではないのかなと思っていました。ですが、聞いてみるとその返答に驚きました。「海は怖いけど、それでも自然の恵みをいただいているから、やっぱり好き」と…。今回元気づけようとの思いでいったのに、逆に元気をもらいました！金色堂という重要文化財にも行きました。大きな神社などがあり、とても文化を感じました。この日はこの3日間の事でまとめて各班で発表しました。考え方や伝え方など皆それぞれ違っていたりしていい学習会になりました。奇跡の一本松も見に行きました。7万本ある松の中でたった1本だけ、津波で流されなかった松の木です。壮大にそびえたっていて、とても存在感のある木でした。現在は修復をして残しているそうです。

【最終日】

福島にある中学校に行きました。津波が来た当時学校には、550人という大勢の人々が避難してきたそうです。すごく不安だったと思うし、私なら早く家に帰りたい、そう思うとおもいます。津波だけじゃなく、福島原発事故がおきて、人の体に害を及ぼす放射線がでたそうです。その後、福島の子供たちがいじめられたと聞いて本当にゆるせない気持ちでいっぱいでした。なぜなら、こんな苦しくて、本当に悲しい思いをされた人たちにさらに嫌な思いをさせたからです。人としてそれはやっとなにかは判断するべきだと思いました。また、校長先生は「子どもが元気だと大人も元気になる」そう言っていました。今思えば仮設住宅に行った時も皆が笑顔で接してくださったから元気になれたんだと思います。なので、これからは私も笑顔で元気に生きていきたいです。校長先生のお話で心に響いた言葉は、「今一瞬を大切に生きる」です。4日間を通して、命は色々な人の関わりからできているんだなと改めて感じました。津波で亡くなった人たちがいて、今生きている私達がいる。最近では皆軽々しく「死ぬ」などと口にするけど、よく考えてもらいたい。「誰の命も大切に」ととてもいい言葉だと思います。また、南海トラフ地震に向けてこの活動で学んだ事を頭の隅に置いておいて、もし来てしまっても冷静に判断できるようにしたいし、こういうときが来てしまったときのための学校の避難訓練等も真剣に取り組みたいです。非常袋の点検や、避難場所の確認など、家族としたり、話し合ったりもしました。

今回は私の人生の中でも最も貴重な体験だったと思います。私が今できる事は、今の現状や現地の人達の声も多くの人に届かせることだと思うのでまずそこから行動していきたいです。今回このような貴重な体験をさせていただきありがとうございました。



東 北 で 感 じ た こ と

伊方町立伊方中学校 3年 林 多花子



私は、今回、この事業に参加するまでは、今、被災地はどうなっているのかなどあまり考えたことがありませんでした。また、テレビでも放送されなくなり、東日本大震災のことについての記憶もだんだんと薄れていっていました。私は、東日本大震災のことについて忘れかけていた自分がとても恥ずかしくなるとともに、そんな自分が嫌になりました。

この4日間で、たくさんの方々に話を伺い、津波によって今の形となった建物や、町を見ました。目的地へ向かうバスでの移動中、車内から見えたのは、窓が全てなく、コンクリートの枠だけが残った校舎でした。その校舎は、本当に目を覆いたくなるような形でした。また、民家などの建物は津波によって壊されたり、流されたりして形を留めないものばかりでした。当時を振り返り、被災した方々は、本当につらいだろうと感じました。また、宮城県、岩手県、福島県や、それぞれの市や町によって、今後の町づくりの対策や計画にそれぞれ違いがありました。特に、陸前高田市は次の津波に備えて、震災前の土地よりも高いところに町をつくる計画を進めています。山を削り、その土で新しい更地を作っているそうです。作業は今なお行われており、たくさんの方々がその計画に携わっていると聞きました。少しでも早く計画が進んで欲しいなと思います。また、防波堤も作られており、市の方たちは「海が見えなくなったから不安」と言っていました。私も海からすぐそばにある町に住んでおり、小さい頃から海を見ながら育ってきたので市の方たちの気持ちはよく分かりました。でも、津波から被害を少なくするには、やはり防波堤が必要なのです。悲しい選択ですが、命を守るためです。

私が、特に心に強く残っていることが3つあります。1つは、元気仙小学校の校長先生の講話の中での津波が来た時の映像です。目の前のものが全て、津波で壊されながら黒い波の中へ飲み込まれていく光景です。2つ目は、米崎中学校の校舎と仮設住宅の近さに、私はとても驚きました。学校内の中に仮設住宅があることは知っていましたが、まさかあれほど近いとは思いませんでした。出会った中学生はとても元気なあいさつを笑顔でしてくれました。逆に、私の方が声が小さくて恥ずかしいと思いました。3つ目は、交流会でのおじさんからの言葉でした。「あなたの命を大切にしなさい。」私の家には、車いすの生活をしている父と祖父と、年老いた祖母がいます。もし、津波が来たら3人を助けることが出来るでしょうか。私1人だけ逃げるなど出来ません。でも、おじさんのおっしゃった言葉を思い出さなければなりません。私の命は1つしかないからです。

この東北ボランティア活動事業で私は、たくさんの方々のことを全身を使って学んで帰ってきました。愛媛では見ることもない景色や、被災者の方を目の前にして聞く実話もこの事業に参加しなければ、経験できなかったと思います。だからこそ、私がこの事業に参加して感じたこと、伝えることができる全てをできるだけたくさんの方に伝えようと決めました。まずは、家族から、そして友達へ、友達から友達の家族へ…というようにたくさんの方々のつながりを通じて広めていきたいです。そして、愛媛にもいずれ来るであろう南海トラフ大地震に備えていきたいと思っています。





今、自分にできること

大洲市立平野中学校 1年 白石航太

僕がこの、～あふれる愛顔でつなごうボランティア活動事業～に参加する前に持っていた印象は、孤独、寂しさ、悲しみなどの負のイメージでした。だから、この活動で被災者の方とふれあい、元気付けられたらなと思っていました。

僕が、今回の活動で一番心に残っているのは、米崎中学校仮設住宅の方々との交流会です。この陸前高田市には、地震で津波が発生しても、3メートルぐらいのものしか来ないと言われていたけれど、実際の津波は、17.6メートルにも及びました。驚いたことに、人々は押し寄せてくる津波を見ながらただ笑っていたそうです。「あのときの私たち、どこかおかしかったんやろねえ。」との被災者の言葉に胸が締め付けられるようでした。

この仮設住宅での興味深い取り組みに、ラジオ体操があります。これは、地震後の8月から始まったもので、仮設住宅内での孤独死を無くそうと、小学6年生3人が始めました。集団生活の中で、何が自分に出来るか考え、行動に移したということに感心しました。僕の住む地域でも、高齢者のみの世帯が多くあります。僕も地域の一員として、力になれるよう行動したいと思います。

この交流会で僕が学んだ一番大事なことは、「自分の命は自分で守る」ということです。そのことを表している東北の言葉に「津波てんでんこ」というものがあります。津波がきたら、てんでんばらばらばらに、高台へ逃げろという意味だそうです。救助活動も大事だけれど、自分の命を失っては意味がありません。また、いったん避難したけれど、自宅に防災グッズを取りに帰って津波に巻き込まれた人もいたそうです。まずは自分が助かる方法を的確に考えられるようにしたいです。

そのためにも重要なのが、避難場所・避難経路の確認です。災害が起きると、被災者の方が感じたように、冷静に考え、行動するということが困難になります。普段から、災害が起きたらどこにどうやって避難するかを家族で、地域で確認しておく必要があります。学校での避難訓練も、真剣に取り組むたいと思います。

交流会の終わりに、米中仮設合唱隊による合唱がありました。歌はあまり自信がないけれど、自分たちが受けた支援への恩返しをする番だと思って歌っているそうです。その歌は、一人一人の思いが伝わる温かいものでした。

活動を終え、僕が抱いていた印象は大きく変わりました。被災者の皆さんは、けっして落ち込んでいるばかりでなく、前を向いて今を生きてもらいました。多くの犠牲の中、助かった命を大切に生きる姿勢に、逆に元気を分けてもらったように思います。

僕がこれからしなければならないのは、この震災を忘れない、風化させないことです。今回実際に見てきた、聞いてきた、感じてきたことを多くの人に伝えていきたいです。そして、近い将来起きると予想される南海トラフ大地震にこの経験を活かしていきたいと思います。





毎日のありがたさ

今治市立日吉中学校 3年 加藤 稜 士

僕はこの「あふれる愛顔でつなごうボランティア活動事業」に参加して、命のありがたさはもちろん、僕たちが日々普通に生活できていることが当たり前でないことがよくわかりました。

まず始めに、宮城県名取市の閑上町に訪れました。閑上は平野が続いているため、津波が内陸に5kmほど押し寄せて来たそうです。そのため被害に合った方が大勢いらしたそうです。

閑上町のある中学校では生徒が13人が犠牲になり、その中の3年生は震災のあった3月11日が卒業で卒業式が命日になってしまい、高校の合格発表も知ることができず亡くなってしまったそうです。僕も今は3年生なので犠牲になった子たちのことを考えると、とても切ない気持ちになります。

次は、5年前の震災でも特に被害が甚大であった岩手県陸前高田市に訪れました。陸前高田市は、リアス海岸になっており津波の高さが18mほどまで上がり一瞬で津波によってすべてを失ったそうです。5年経った今は、122.6ha約東京ディズニーランド25個分、高さ12mほど嵩上げ工事をしており、東京では4年後の東京オリンピックの準備もあり人数が不足し今は800人ほど働いているそうですが1000人は必要だそうです。嵩上げ工事は今年中に終わり、これからは、本格的に街作りを始めるそうです。見渡す限り工事をしているので、甚大な被害を受けていたのがよくわかりました。無事工事が終わりいい街ができるよう安全第一で工事を進めてほしいなと思いました。

その後、陸前高田市の戸羽市長にお話を伺うことができました。戸羽市長は市長に就任してすぐ震災があり、津波で奥さんを失い、一度は息子と逃げることも考えたりいろいろな挫折を乗り越えて今は陸前高田の復興を進めているそうです。市長が僕たちに一番教えてくださったのは、家族や友人を大切にしろです。僕は、改めて、家族や友人を大切にしようと思いました。

3日目、僕たちは陸前高田市の米崎中学校仮設住宅に御邪魔しました。ここでは5年経った今、仮設住宅から出て行った人もいたがまだ暮らしている方もいらっしゃいました。3.11の震災では地震での被害はなく、ほとんどの方が津波で命を落したそうです。大津波警報が出されても、気象庁が予想していた津波の高さは3mほどだったらしく、「防潮堤もあるから大丈夫だろう」と、ほとんどの人が思ってたらしくそのため予想を津波が来たためより被害者の数が増えたそうです。今、被災地では震災前の防潮堤をはるかにこえる10m以上の防潮堤を作っておりますが現地の方は逆に海が見えなくて怖いとおっしゃっておいりました。あくまでも防潮堤は、津波が来るまでの時間稼ぎであって防潮堤があるからって安心してはいけません。高台などでは真っ黒の津波に自分たちの街が襲われているにもかかわらず、泣いている人はほとんどおらず、中には、精神的におかしくなっている人もいて「私の家が～」と言いながら笑っている人もいたそうです。だが、一番恐ろしいのは、この押し寄せてきた津波が引くときの引き潮だそうです。津波が押し寄せてくるだけならば陸にのこるけども、引き潮によってすべてを海に持って行かれてなにもかも失ったそうです。避難所生活では中学生が自分たちはなにも食べず避難して来た方に食べ物を分け与えていて、「中学生にはとても感謝しています」とおっしゃっておいりました。僕も人の役に立つ事を見つけて実行できる人間になりたいです。最後におっしゃっていたのが、自分たちのすべてを海によって奪われたけど嫌いではなく、普段は、おだやかでいい海が好きだとおっしゃっておいりました。

最後に今回の事業を通して、僕たちの一人一人の命はたくさんの人の支えがあって生かされているのであり、僕たちが毎日普通の平和な生活がおくれるのは当たり前でないことに気付かされました。僕たちは奇跡の一本松も訪れましたが本物は枯れてしまい今は作り物だけど、後ろの建物と共に津波の恐ろしさを次世代の人たちに伝えて、同じような被害を出さず、被害を最小限にしてほしいです。それに、僕たちも南海トラフ地震が発生すると言われているので防災対策などをしっかりしておきたいです。



命を守る

松前町立松前中学校 2年 吉田真文



東日本大震災が起こったとき、私は小学2年生で被害の大きさをわかっていませんでした。中学生になって、被災地の様子を知りたい、自分にできることを見つけたい、と思って、今回ボランティア事業に参加しました。

被災地に行く前、私は被災者の方を元気にしたいと思っていました。しかし、被災者の方々は元気で力強く、想像とは反対に自分が力と勇気をもらいました。被災地をじぶんの目で見て、被災の体験談を直接聞いたことで、現在の様子を知ることができました。

とくに印象に残ったのは「自分の命は自分で守る」ということでした。戸羽市長さん、元気仙小学校校長菅野先生、米崎中学校仮設住宅の方々全員の震災の経験から命を守るために日常生活でできる備えを5つ学びました。

1つ目と2つ目は戸羽市長さんがおっしゃったことです。戸羽市長さんは、「自然の力は私達の想像以上ですが、備えをすることは誰にでもできます」と話されました。まず、家族と話し合いをして、災害が起きたときの避難場所を決めておくことです。震災のとき一度避難して助かった人が、バラバラになってしまった家族が心配で捜しにいき、津波にのまれて命をおとしたそうです。災害が起こる前に話し合っておけば、家族の命を守ることに繋がったのではないのでしょうか。

2つ目は、防災訓練に取り組むときや他の地域で災害があったときに他人事ではなく、自分のこととして考えることです。自分のこととして考える人が増えれば、地震が起きてパニックになっても、日頃の避難訓練が生かされ、被害を減らせるのではないかとおもいました。

次に、菅野先生のおはなしです。出会ったひとに挨拶をしたり、地域行事に積極的に参加したりすることで、お互いの名前と顔をおぼえることができ、自然災害が起きたときに助け合えて、救える命がふえます。私は、挨拶をしたり、地域行事に参加したりすることが防災につながるとはおもっていませんでした。備えとなるものは、日々の生活の中にあることに気付きました。

5つ目は、米崎中学校仮設住宅の方々のお話しです。

米崎中学校仮設住宅の方々には、地震がきたらまず高台へ、そしてできるだけ遠くへ逃げしてほしい、とおっしゃっていました。「津波はこないから」と言って避難しなかったひとたちは全員津波になまれたそうです。東日本大震災前の津波の予想は0.5mだったのが、実際は17mで全くの想定外だったそうです。だから、地震がきたらまず逃げるのが命を守ることを実感しました。

ボランティア事業を終えて今、自分にできることは、地震への備えをすること、いのちを大切にすること、学んだことを友達や地域の人に伝えることです。伝えることで、被災者の方の「私達の経験を生かしてほしい。」という願いにこたえたいです。そして、いまを大切に生活したいです。





一番怖いのは記憶の風化

四国中央市立三島南中学校 3年 西原彩夏

5年前の東日本大震災がおこった時に一番最初に感じたこと、それは…大変そう、でも自分達は大丈夫だろう、という事でした。危機感と言うものを持っていませんでした。そして5年がたった今、私は今回防災活動研修事業があると知り、今の現状を知るべきだと改めて思いました。「閑上の記憶」と言う館内を見せていただいた時、私は、近くにある日和山がとても印象に残りました。所々崩れている階段は当時の地震の強さを物語っていました。その上、元からあったはずの石の鳥居は根元から折れていて跡形もありませんでした。見ていると心をえぐられるようで本当に大きな被害だと感じました。

日和山へ登ると、私は何もなくなってしまった町並みを見ることができ、そして、「名取市の慰霊碑」が目に入りました。小高い丘にそびえる慰霊碑は、木のつぼみのような形をしていました。そこには、生きてきた人の「記憶」と津波によってたくさんのもを失った「記憶」それらが全部詰まっていると感じました。亡くなった方の遺族の願いと亡くなった人の思いの強さがここにあると思います。そしてもう1つ、東日本大震災の起こった3月11日は、閑上中学校の卒業式でした。3年生も亡くなっていました。きっと3年生も卒業式が命日になるとは思っていませんでした。私達と同じ年で生きたいと頑張りたいと思っても生きる事が出来なかった人はたくさんいるのです。

奇跡の一本松と未来へのメッセージ

東日本大震災の象徴ともされる、奇跡の一本松。約70,000本の松の中でたった1本が残った事から呼ばれています。私は、被災地でたくさんの方々とふれあい、災害の備えを学びました。津波「てんでんこ」も教えていただきました。この意味は、「自分の命は自分で守れ」という意味です。大震災が起こった時、親がどこにいるのか分からず戻ったために亡くなった人が、沢山いました。人を助けて死んでは意味がないと言う事です。私達は、したい事もいくらでも出来るのにそれをやらないのはもったいないと思います。

「全力で今を生きる」私達が一番やるべき事はそれだと思います。自分の命を大切に、人の命も大切にしていきたいです。



私たちの役目

大洲市立大洲北中学校 2年 東 のどか



私がこの研修事業に参加した理由は、命の大切さを知り、南海トラフに備え、実体験者話はニュースとは違う奥深さがあり、自分たちにできることがあると思ったからです。

私が心に残った話は、米崎中学校仮設住宅に住む方々との交流会で、私たちの班に海が怖くなったと語ってくれた方がいました。津波が来て液状化現象が起こる中で、迷っていたら命が無い、と思ったそうです。逃げる途中で見えたガレキは地獄に見えて、海が怖くなったそうです。しかし、そんな中で立ち上がったのは、海に恩恵を受けているから、陸前高田市のおいしい“うに”をもらってきたのに、ふるさとを侮ってはだめ、と言うように語ってもらいました。やっぱり、実体験者の話は実際に聞いてみる方が価値があるなと思いました。

次に米崎中学校仮設住宅と同じ陸前高田市にある奇跡の一本松を見て強い生命力を感じました。はじめて見たのは遠いバスの中からでした。でも、間近で見ると言葉が出ないほど力強いものだと思いました。今あるのは本物ではなくモニュメントですが、7万本の中で1本だけたくさんの寄付により今もあると思うと、生命力とふるさとの力ってすごいと思いました。

この3泊4日で見ると聞いて感じて学んで思ったことを、家族・親戚・友人たちに伝えるのが私たち32名の役目です。もう二度と過ちを繰り返さない。この研修事業でお話して下さった方のほとんどが「次の世代へ伝えていって下さいね」「若い人たちが来てくれてうれしい」「津波でんでんこ」ホテルで会った方たちには「わざわざ愛媛から来てくれたの？ありがとう」と言っていました。私たち32名の役目は、伝えることの他に“防ぐ”と言うことがあります。過ちを繰り返さないためには、話して終わりではありません。きちんと役目をこなし、南海トラフでは一人も命を落とさないようにしたいです。学ぶことの他にとても楽しい3泊4日のボランティア活動事業でした。





この研修で改めて気づいたこと

松前町立岡田中学校 3年 大西 彪太郎

僕がこの研修で学んだことや改めて気づかされたことは3つあります。

まず、仮設住宅の方が、地域とのコミュニケーションが大切だとおっしゃっていました。それは、地震などの災害が起こったとき、近所の人達とコミュニケーションを取っておくと、「あの家にはお年寄りの方がいる。」や「車椅子の方がいる。」などと把握することがき、避難するときに助けに行くことができるからとおっしゃっていたからです。

次に、初めに行った名取市閑上をはじめ、2日目、3日目、4日目に行った、全ての場所や、お話をしてくださった全ての方々から改めて気づかされたことです。それは、命の大切さです。「命を大切に、まずは自分の命。」と言われていたり、「津波てんでんこ」と言って「自分の命は他人のではなく自分が守る」と言われていたりします。僕はこれを聞いて、必死に、自分の命を守ろうとしていることや、命をととても大切にしようとしていることがすごく伝わってきて、当たり前のことを改めてよく考えさせられました。

最後は、元小学校の校長先生から、教えていただいたことです。それは、本をたくさん読むことです。なぜなら、本を読むと自分が体験できないことができるからです。なので僕も、勉強の息抜きに本を読むようにしたいと思います。

このように、この研修では、たくさんの方に気づかされ、よい経験をすることができました。ここで体験したことや、見聞きしたことを一生忘れずに、これからの人生に活かしていきたいです。





東日本大震災から5年被災地陸前高田市について

松山市立西中学校 1年 山内 凜人

僕は以前からボランティア活動に興味があり中学校に入ったらボランティア部に入ろうと考えていました。しかし、僕が入学した松山市立西中学校にはボランティア部ありませんでした。ボランティア活動をどうやってしようかと思っていたところ、夏休み前に学校でもらったプリントの中に、愛媛県PTA連合会主催 防災活動研修事業「あふれる愛顔でつなごうボランティア活動事業」があり、この事業で東日本大震災の被災地に行ってボランティア活動ができることを知りました。誰も知り合いのいないボランティアに参加するのはとても不安でしたが、「こんな貴重な機会はめったにない。」と思い勇気をふりしぼってこのボランティア活動に参加することにしました。

(1) 日時 平成28年8月2日～8月5日 陸前高田市他にて、復興現地視察と陸前高田市で地元中学生等交流。ボランティア活動参加。米崎中学校仮設住宅の方々と交流。ボランティア活動参加 復興工事現場視察、仮設住宅見学など。

①陸前高田市について。

陸前高田市は岩手県南東部にあり、太平洋に面しており、リアス海岸が続く、西の唐桑半島と東の広田半島に挟まれた広田湾の北奥に市中心部のある平野が広がる。小さな平野ではあるが、山が海に迫る地形が続く三陸海岸では最大級のものである。広田湾奥には気仙川が流れこんでおり、その運ぶ土砂で形成された砂州には高田松原と呼ばれる松原が東西に続く。高田松原の北に古川沼があり、その先の山麓に中心市街地があり、その北には氷上山がそびえる。広田半島には椿島などの景勝がある。

面積：231.94km²、総人口：19,525人（2016年6月1日現在）、人口密度：84.2人/km²、市の木：すぎ、市の花：つばき、市の鳥：かもめ

②東日本大震災による陸前高田市の被害状況について。

ア・地震の状況

発生時間：平成23年3月11日金曜日 14：46、震源地：三陸沖、震源の深さ：約24km、地震の規模：マグニチュード9.0、陸前高田市の震度：6弱

イ・津波の状況

津波の高さ：17.6m 最大そう上高21.5m

ウ・人的被害状況

総人口：24,246人（住基人口 平成23年3月11日現在）、生存確認数：22,018人（平成24年10月23日現在）、死亡者数：1,556人（震災犠牲者）、行方不明者数：216人、浸水地域犠牲者率：10.7%（被災地最大）

エ・被災戸数 3,368戸

全壊：3,159戸、大規模半壊：97戸、半壊：85戸、一部損壊：27戸

③今後の陸前高田市について。

今回の恐ろしい経験から学んだ津波防災、減災の教訓から、市民が安心して暮らしていけるまちづくりのために、平成23年12月に、創生と生活力向上に繋がる「陸前高田市震災復興計画」を策定し、30年度までを計画期間として6つのまちづくりの基本方向の第一に「災害に強い安全なまち」を定め今後市街地や住宅地を津波による浸水から免れるよう高台やかさ上げ地に整備する。また、防潮堤や水門などの海岸保全施設や避難しやすい避難道路（シンボルロード等）を整備するなど、災害に強い安全なまちづくりとする。特に、防災機能が麻痺した教訓から、災害対策本部が設置される市庁舎や消防救急活動の拠点となる消防庁舎は、東日本大震災の津波浸水域外の高台を基本とし整備していく。

東日本大震災で犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を捧げます。愛媛県PTA連合会主催 防災活動研修事業「あふれる愛顔でつなごうボランティア活動事業」でお世話になった皆さんに心よりお礼を申し上げます。ボランティア参加費用を出してくれ、不安でいっぱい僕の背中をドンと押し、ボランティアすることの大切さ経験することの重みを教えてくれた両親にも感謝します。

東日本大震災の発生から、5年が経過し震災のつめあとは表面的には消えつつありましたが、被災者の方々の悲しみや苦しみは消える日はないようでした。あの日発生した大きな揺れと津波は、人々の日常の全てをうばい去り、まちの姿を一変させていました。そして、絶望の淵に立たされたようでした。それは今までの僕には想像もできないことだと思います。被災地視察では、目をおおいたくなるような被災状況や、耳をふさぎたくなるような被災者の話を全身で体験してきました。そこで、今、自分のために自分のできることは何か。人のために自分のできることは何か。を考える時間が持てました。自分の目・耳・肌・心・全身で被災地の現状を感じ、体験したことを少しでも多くの人に知ってもらうため、夏休みの自由研究等でこの様子を発表するとともに、今後もボランティア活動を続けていきたいです。そして、今後発生が予想されている南海トラフ地震に備えることができればと思います。



記憶をつなぐ

西条市立西条東中学校 2年 菊池 凜子



私がこのボランティア活動を通して1番心に残ったのは、米崎中学校仮設住宅自治会の方々との交流です。

みなさんは、共通して「誰もあんな大きな津波が来ると思わなかった」と、おっしゃっていました。

実際にはとても大きな津波が街や人を次々におそっていきました。ここに津波は来ないと思っていた人達は逃げおくれ、家や車が津波に乗っておしよせて来て、それに追いかけれ、おそろしい思いをしたという方がいました。他にも商店街でお話しをしていた人達はやってきた津波にのみこまれて亡くなったという人達もいました。

私はこのお話を聞いた時ゾツとしたと同時にまた同じような事をおこさないため私達が今できる事はないのかと尋ねてみたところ、いくつか上がってきました。

1つ目 友達をたくさんつくって友達を大切にする。

○友達がいればいるほどおたがい助け合いながら生きていきます。

2つ目 コミュニケーションを大切にする。

○みんなと仲よくなれます。

3つ目 地域の家の状況を確認しておく。

○これをする事により誰かの命を救う事につながります。

4つ目 人やインターネットにたよらない。

○自分の命は自分で守る。

という事です。

私達は、今あたり前に親とケンカする事ができて、あたり前に生活をして友達がたくさんいます。

でも、今親を亡くしてケンカもできない子供がいます。いつもの生活ができない人達、友達を亡くした人がいます。私達のあたり前はあたり前であってあたり前ではない。生きてるのではなく、たくさんの人達に支えられ生かされている。この事に改めて気がつかされました。今こうして何事もなく幸せに過ごしている事に感謝して日々の生活を送り、ひごろから感謝の気持ちを伝える事が大切です。今、被災地で私達と同じ中学生やたくさんの方々が復興に向けて精一杯努力している事、今もまだ心のケアが必要な方がいる事を決して忘れず、被災地の方々のたくさんの記憶を未来につなげていきたいです。

地震で亡くなった方々達は私達に命の大切さを教えてくれました。亡くなった方々の命はまだ被災地にあります。死んでも終わりではないです。私達が伝えられる事はまだまだあると思うのでがんばります。

本当に今回のボランティアを通して命の大切さがひしひしと伝わってきました。被災地の方々が最後にAKB 48の「365日」と、あいの「みんながみんなのえいゆう」を歌ってくれた時、ふだんはなんとも思わず聞き流していましたが、話を聞いた後だと被災地の方々の思いが詰まっている感じがして感動しました。

初めてお会いしたにもかかわらずかんげいしてくれ私達を笑顔にしてくれました。それがなにより嬉しかったです。被災地は暗いというイメージがありますが、みなさんととても明るくて笑顔にもらえる、そんな所でした。また行きたいです。

そしてまた会った時に今よりもっと被災地の状況や被災地の方々がした体験などをたくさん伝えられているといいです。





ボランティア活動に参加して学んだこと

新居浜市立川東中学校 2年 永 易 将 大

ボランティア活動に参加したきっかけは、防災活動に関心がなかったため防災活動に関心がもてるようになりたかったからです。今回参加する事になって思ったことは、ボランティアに参加出来なかった人の分も頑張ろうと思いました。

今回感じたことを行程表の日程順に書いていきたいと思います。初めて飛行機に乗って感じたことは、ジェットコースターのような感覚でした。特にお腹の中の臓器が持ち上がる感覚です。最初の結団式の抱負発表は、とても緊張しました。皆さんとてもいい抱負を述べていました。ホテルでは、仲間とのコミュニケーションが深まりました。正直言うと、あまり眠れなかったです。

8月3日の活動から感じたことは、関上の記憶の館内の見学をしていたら、館内には、被災者が作ったマップがありました。見ていたら血だらけの人が倒れている粘土がありました。子供の頃からそんなものを見ていたら、この先、引きこもるかも知れないと思いました。しかし、子供より大人の方が引きこもる人が多いので、大人が子供の心のケアをしているより子供が大人の心のケアをしているという事でした。僕たちが中学校を訪れていた時に高校生の方が一人来ました。その方は朝の体操を勧めてみんなで体操しようとひろめた人です。僕はその人と話を少ししました。とても、しっかりとした人でした。機会があれば、またお話をしてみたいです。

次は陸前高田市にいきました。かなりの被害がでた地域だそうです。その地域の方とゆべし作りをしました。蒸している間に地域の方が先に作ったゆべしを食べました。抹茶をたてて、一緒に食べました。抹茶のとてもいい苦味とゆべしの甘さが良かったです。また食べたいです。

戸羽市長さんからの話を聞きました。当時の被害の規模が伝わって来ました。とても真剣に僕たちの話を聞いてくれていたので、とてもいい方だと思いました。

ホテルでの学習会は小学校の元校長先生が来てくれました。その学校では、誰も津波で死者がいなかったそうです。その理由は、校長先生の正しい指示があったからだだと思います。その指示は高い所に登る事です。皆さん言っていました、遠くより高い所が良いそうです。それと車で逃げるより歩いた方がいらしいです。車で逃げると渋滞してしまいます。自転車で逃げるとどうなるか高校生の方に聞いてみました。答えは高い所に逃げるので坂を自転車で登ると疲れるし、遅いという事でした。だからこそ自分の足で逃げた方が良いです。これも大切なことだと思いました。

8月4日は、米崎中学校に行ってきました。自治会長さんとも交流しました。その地域の方とも交流し、質問もしました。とてもいい勉強になりました。最後に発表しました。最初の結団式より緊張しました。そのあと米崎中学校からシャークミュージアムに行きました。時間がなかったため昼食を食べるだけでした。僕は刺身が苦手なため一人だけ別行動でした。それでラーメンを食べました。とてもコシがありました。あと、お土産もおばあちゃんのために買って行きました。

その後に中尊寺を見学しました。とても自然あふれるお寺でした。讃衡蔵の中には坐像がたくさんあります。例えば薬師如来坐像、阿弥陀如来坐像、大日如来坐像などなどあります。その後、金色堂に行きました。厳重に警備されて、小さい金色の建物の中に像がありました。とても綺麗な金色でした。その後に復興祈願をしました。いい見学でした。

ホテルでは、報告会があり、各班発表しました。報告会では、3日間学んだことを報告する会です。僕の班では、奇跡の一本松を背景にしました。とてもきれいでした。僕は、発言するのが苦手なので少しかだけ発表しました。また、12月ぐらいにあるみたいなので、その時は頑張りたいです。そのためには、日頃から話すことも大事だと思います。

8月5日は鹿島中学校に行きました。初めて生で仮設校舎を見ました。とても便利とは、言えないですが、最新の物もあり思った以上に仮設校舎が充実していました。まだ南相馬市には、放射線があります。それを測るための機械も見ました。

ここまで、地元の方を見てきた思ったことは、皆さん笑顔で接してくれました。これも心のケアのおかげかもしれません。あと、津波が来た時の事をはっきりと覚えている事です。米崎中学校の人たちと交流して、地元の方に質問した時とてもはっきり覚えているような感じがしました。

最後に参加して、みんなに伝えたいことは、本当に準備が必要で推測に頼らない。自然は推測出来ないと思っていいでしょう。それほど自然とは、怖いものです。だから津波の高さの推測が1mと言っても高い所に逃げる事が必要です。このボランティアに参加して、とても良かったです。地震と津波の対策ができ、いろんなことを学ばしてもらいました。これからどんな災害が起こるかもしれませんが、常に安心せず、準備をしていこうと思います。有難うございました。



人とつながる

四国中央市立川之江南中学校 1年 宮崎 華



私が東北に行って分かったことは、人とのつながりを大切にする事です。震災がおきた時に、人とのつながりを大切にする事で、頼れる人がいたり、1人ではできないことができるようになったりします。なので、日々の生活の中でも人とのつながっていく、これが毎日できる防災だと思います。

人とつながっていくことの大切さ、それは、仮設住宅で暮らす方々が教えてくれました。こう考えたのは、私は初め、仮設住宅で暮らしている方の話を聞くのは怖いと思っていました。それは、避難所や仮設住宅は、1人になってくるしかったり、周りに気を使ったりストレスがたまる。こういった話を聞いたことがあったので、そう思っていました。仮設住宅で暮らす方は、家族を失った時の話や今でも夢に見るつらい体験のことを話して下さいました。

でも、今はたくさんのつながりができて、幸せだという話を笑顔でしてくれました。仮設住宅で暮らしている人は、津波があったから、みんな友達になれたと言っていました。

私はこの話を聞いて、想像していた雰囲気とは全く違わずっと明るい人たちでした。どうしてこんなに明るいのか考えてみました。ここで暮らしている人たちは、時間が傷をいやしてくれたというよりも、時間だけではない、人がとりにいてくれてお互いに話げできたから、こんなに明るい笑顔があるのだと思いました。

では、こんな震災があった時にここまで仲良くなれたのはなぜでしょうか。私は震災や災害があると、1人になってしまつて1人で何もかも頑張っていかなければならないと思つて周りが見えなくなつてしまつて思つます。けれど、この仮設住宅で暮らしている方々はみんながみんなの気持ちを考へていたと思つます。誰かの立場にたつて考へたり、誰かのことを理解するのは、とても難しいと思つます。それに人のことを理解するということは、自分のことをしっかり理解しているということだと思つます。だから、ここで暮らしている人たちは、自分のこととも向き合つてきて、今があるのだと思つます。

ということから、人とつながるには、お互いに話をするこゝ。みんなの気持ちを考へること。自分のことと向き合うこゝ。この3つのこゝを行つていくこゝが重要だと思つたからです。

なので私は、つながるためにたくさんの人と話をして、相手の気持ちを考へます。そのためにも、自分の行動に責任を持つこゝで、自分と向き合い、たくさんの人と話す機会を自分から行事に参加するなどして作つていきます。

また、仲間みんながこう思えるように、中学校で発表する機会があるので、人とつながるこゝの大切さを知つてもらつたため、被災者の気持ちや、言葉がわかるように伝えていきます。

災害を無くすこゝはできませんが、人とつながるこゝが防ぐこゝにつながる防災だと思つました。

最後に、この事業を支えてくださったたくさんの人に感謝します。こんな貴重な体験をさせて下さり、本当にありがとうございました。





あふれる愛顔でつなごうボランティア活動に参加して

西予市立宇和中学校 3年 鎌田 奈実

陸前高田市の復興現場、津波が来る前は普通に家が建っていたのに津波が来た後は、そこに何があったのかわからないくらい全部流してしまっただけです。

でも今は、山を崩してその土で元の土地よりもかさ上げしています。今もまだ、空き地でしたが、そこには街の中心となる建物が出る予定だそうです。

米崎中学校仮設住宅では、自治会長さんや高校生の龍之介さんとお話することが出来ました。やっぱりニュースや新聞で見たり聞いたりするよりも、実際に被災した人たちの話は、思いが伝わってきました。

「震災は、つらいこともあったけれど、仮設での暮らしはつらいことだけじゃなくて、楽しいこともあった。」と話されていました。

龍之介さんは、仮設住宅でラジオ体操を始めた人です。「みんなに笑顔になってもらいたい。」と始められたそうです。

今は、もう5年前の東日本大震災を忘れていない人もいますが、「今も懸命に努力している人たちがいる」ことがわかりました。

仮設住宅では、悔しいときもあったけれど、でも、誰かがみんなを笑顔にしようと働きかけ、陸前高田市では、多くの人たちがこの土地でよりよくすごせるように土地を改善している。ということは、とてもすごいことだと思います。自分に出来ることを、精一杯やりとおそうと思いました。

自分ひとりの力ではどうしようもないことでも、周りの人たちと協力して何をするのがよいか、被災した人たちが話されていた、「小さな子供からお年寄りまで笑顔になるようなこと。」とはどんなことなのか。しっかり考え実行したいと思います。

龍之介さんは、1軒1軒みんなに声をかけ、ラジオ体操を始めました。自分も、まずは、なかのよい友達から今回の活動について話をし、部活の仲間、クラスメイト、中学校全体で「東日本大震災」について話し合える機会を作れば最高です。

そして、復興が成し遂げられたとき、今回訪問した場所にもう一度立ち、自分も復興の役に立てたのか、思い起こしたいと思います。





防災ということについて

愛媛大学教育学部附属中学校 1年 辰 巳 ゆめの

「自分の命は 自分で守れ」

私は、この愛媛県PTA連合会「防災活動研修事業」に参加して、この言葉が、一番心に残りました。

東日本大震災の日、私はまだ小学1年生で、学校にいました。「6年生のお別れ会」をしているところでした。その後、家に帰ってテレビを見て「うわあー！大変だ。」と思いましたが、そのくらいしか記憶に残っていませんでした。学校で、義援金を集める募金に参加しましたが、その深刻さはまったくわかっていませんでした。

研修の2日目、名取市の「閨上の記憶」に行きました。そこは、津波が来る前、約5000人の人々が住んでいた場所でした。今は「更地」になっていました。私と同じ中学生が14人も亡くなっていました。波にさらわれて街がなくなるということが、どういうことかよくわからなかったけれど、確かに何にもない土地になっていました。この街の人たちも「日和山」までは津波が来ないと思っていたのに、津波で山がなくなってしまったということでした。「このくらいは大丈夫。私だけは大丈夫。」とってしまったことが大切だと思いました。

その後、陸前高田市では、あの「奇跡の一本松」や復興現場の最前線も見せていただきました。ここも津波による被害が、甚大だったということでした。10m以上もの津波が、気仙川をさかのぼりました。市長さんや元・気仙小学校の校長先生の講話を聞けば聞くほど、「津波が来る」ということの怖さがだんだん自分の中に入ってきた感じがしました。地震だけだったら、死なずにすんだ人たちも津波が押し寄せたことで助からなかったのだということもわかりました。

津波が来ると恐ろしいことは、大勢の死者が出ること・遺体がどこにいったかわからなくて見つからなくなること・そして、しばらくすると忘れられてしまうことだそうです。毎年大きな地震が起こって、津波が来るわけではありません。今度、津波が来るのは、東日本大震災の津波を知らない人たちばかりの時代になっているのかもしれない。だから、「何が起こったのか」「どんなふうにして命を守るのか」いつか誰かが地震や津波で、命を落とさないように伝えていかないといけないと言われていました。

そして、大震災から5年。少しずつ復興が進んできていました。しかし、まだ仮設住宅に住んでいる人たちや自分の住んでいた家に戻りたくても戻れない人たちが大勢いることを知りました。確かに、私はあの時のすごさやショックが薄れてきているように思いました。今回、この研修に参加して、大震災に関して何も知らなかった自分が、自分の目を見て、聞いて「知る」ということができたと思います。「知る」ことができたので、被災した人たちと同じように思うことはできないかもしれないけれど、何ができるかを考えていきたいと思いました。

被災された方々のお話から、自然による災害は想像をはるかに超えてやってくることや最悪の場合をいつも考えて行動することも学びました。私も三陸地方に昔から伝わる言い伝え「てんでんこ」を大切にしたいと思います。





地震・津波・原発事故の恐怖

砥部町立砥部中学校 2年 二宮 寛隆

僕が、この研修に参加しようと思ったきっかけは、東日本大震災の恐ろしさと、復興の現状を知りたいと思ったからです。

まず1日目の夜に東日本大震災のことについての、勉強会がありました。ここでは、この震災がどれだけほどの被害を及ぼしたのか、どれだけ、恐ろしいものだったのか思い知らされました。初めの研修地は、関上地区です。関上地区では、最大約10メートルの津波が、関上の街を、襲いました。関上には、日和山というところがあります。日和山という約6.3メートルの人工の山より約2メートルも高い津波が押し寄せました。この津波で亡くなった関上中学校の生徒の14人の名前が、刻まれている石碑があります。この石碑は、人々がさすり、なでて角がとれるくらい丸くなるまで、手の温もりを、感じてくれるように作られています。次に、陸前高田市では、復興に向けた工事が着々と進んでいました。また、印象に残ったのは、土砂を運ぶ解体中のベルトコンベヤーです。稼働していた時は、全長約3キロメートルもありました。まさにこれが復興への「希望の架橋」だと思いました。次に、ゆべし作りを体験しました。震災で苦勞をしても伝統を守ろうとしているなんてすごいことだと思いました。最後に陸前高田の戸羽市長の講演がありました。戸羽市長の講演で「自分の命は、自分で守る」ということが、大切だと教わりました。「自助・共助・公助」で助け合っていく事が大事だということがよく分かりました。また、元 気仙小学校校長先生のお話を聞くことができました。あの日、校長先生は、児童を、守るために誰よりも早い避難を、心がけたそうです。「率先避難」を心がけることによって生死が分かれるそうです。このお話を聞いて、震災で被害にあったとしてもそれを乗り越えて、立ち上がろうとする勇気と気力が大切だと思います。

3日目は、奇跡の一本松を見ることができました。奇跡の一本松は、昔あの一帯に松が植えられていて、それが津波でほとんど流されましたが、その1本だけが力強く残っていたので、「奇跡の一本松」と呼ばれています。そのあと、移動して米崎中学校仮設校舎に行きました。米崎中学校仮設校舎では、被災者から直接お話を聞くことができました。あの日から、人生が大きく変わったそうです。17.6メートルの津波が襲いました。僕が、聞いた人のお話ではたまたま赤ちゃんを連れて2時ごろに病院に行っていたら、黒い津波の壁が街を、襲ったそうです。このように運が良くて命が助かった人もいました。被災者の方々から学んだことは、いろいろな意味で、僕たちは、今日まで「生きているのではなく、生かされている」ということです。そのためにも自分の命は、何としてでも自分自身で守ることが大切だと思いました。「津波てんでんこ」という言葉が三陸地方に伝わっているということがよく分かりました。続いて平泉にある中尊寺を訪れました。中尊寺では、秘佛・一字金輪佛頂尊を拝観しました。僕は、被災地の一日も早い復興と、安泰を祈りました。3日目の夜は、現地報告会が、ありました。僕は、関上地区について、戸羽市長のことについて自分が思ったことを、発表することができました。

4日目は、南相馬市立鹿島中学校を訪問して、原発事故の現状を知ることができました。原発事故によって、南相馬市内でも対応がばらばらで、混乱があり、今も自分の家に帰ることができない人が多くいることが分かりました。原発事故ほど、怖いものはないと思います。

この研修を通して、東日本大震災の被害状況と復興の様子を知ることができたので良かったです。今回研修に参加する以前は、被災地のことは、自分には、あんまり関係ないことだと思っていました。ですが、今回の研修で、被災地の復興は、全国のみんなで助け合い支えあっていかなければいけないと切実に思いました。将来起きる可能性がある南海トラフ地震に備えたいと思います。



関上中学校跡地の慰霊碑

東北に行って

愛南町立御荘中学校 1年 井上 空



1日目、僕は、『いやだな〜。』と言う気持ちで東北に行く松山空港の飛行機に乗る場所まで行った。飛行機に乗る所まで行った時、父が昔『飛行機は重力が強い。』と言っていたことを思い出した。そう思ったら怖くなってきた。でも楽しそうという感情もあったのでがんばって乗った。乗る途中に僕は思った。無事帰ったら友達に話してあげようと思った。乗ったらそれ程高さが高くなく僕が立つと座席の天井に頭が当たるくらいだった。でも座席以外のところなら2m位だった。ちょっと狭かったのが辛かった。そして飛行機が発進する時、後ろに重力が凄いかかり気持ち悪くなった。飛行機に揺られて何分だろう。普段軽く感じる重力も、飛行機に乗ると重く感じる。そして、飛行機の外に出た。最初友達に話そうとしていたけどそんなことどうでもいい。そう僕は思った。『やべー』とか『その気になったら余裕吐ける。』等を口ずさみ次の飛行機に乗った。さっきの状態と一緒に気持ち悪かった。そしてとうとう東北に着いた。

そして、バスで移動した。疲れていたのかバスで寝る人もいた。そしてバスで何分か、ホテルに着いた。僕と二宮君が同室だった。ホテルには、大浴場と室内に風呂があった。僕は、大浴場の方がいいなあ。と思って二宮君に言ってみた。『いいよ』と言ってくれたのでよかったと思った。ホテルのご飯を食べる所でご飯を食べた。

2日目、目覚めは普通。二宮君が言っていた。『寝息すごかったよ』笑いそうな声をこらえる様な声で言っていた。起きた後、朝ご飯食べ終えてバスに乗った。バスに長時間揺られた。

やっと閑上に着いた。閑上の人のお話を聞いた後に、閑上の記憶のビデオを見た。閑上の横の碑石にいったい触った。そして閑上の記憶の中の茶色い線があったので何これ？と思っていると閑上の人がそれは、津波が来たところだよと教えてくれた。なるほどと思った。最後に閑上の人に御礼を言ってバスに乗った。その後ゆべしを作りに行った。作り方を間違えたけどできてよかったと思った。間違えた時は、どうしようなんて考えていた。まあ食べれたらいいかなと思っておし、続行した。何分か蒸してもらって完成品を食べた。お茶をたてるのがうまいと言われたのでうれしかった。完成品はモチモチしてておいしかった。そして蒸し終わり形を整え出来上がり。食べるのは夕ご飯の時に食べるようにと言われた。お礼を言ってバスに乗った。次に、市長さんの話を聞いた。市長さんの話は結構勉強になった。

3日目体がだるい。多分昨日の寝た時間が問題だと思う。気を取り直して3日目の研修をする。そしてバスに乗った。そして仮設住宅に行った。仮設住宅の人はどんよりした暗い雰囲気かと思ったけど結構、柔らかな空気だった。なので、なじみやすかった。その中で一人友達ができた。僕はその人と結構話した。そして小学校5年生の時に東日本大震災にあった人が来てくれた。その人が少し話してくれた。僕は僕の知らないところでこんなことがあるなんて知らなかった。その後仮設住宅の人が合唱をしてくれた。その歌声は、震災を受けていても、受けていないような声だった。その後僕は少しの人に『さようなら』、と行って歩いてバスの所に行ってバスに乗った。バスに乗ってシャークミュージアムでご飯を食べた。その後中尊寺に行った。中尊寺では、結構歩いて足が棒のようになった。帽子がなかったためタオルで代用した。水にぬれたタオルは気持ちよかった。そして、中尊寺を回って地下鉄みたいな所を使ってバスのところに行った。そしてもう日が落ちてきてホテルに行った。『その夜はエンドレスで』とかいわれたので、2～3時間ぐらい怒られるかな？とおもったけど、これまでの事をまとめると言うことだった。僕は文等を作るのは苦手なのでエンドレスとは本当だった。その後頑張ってやり終わり、書いたことを全班に発表をした。恥ずかしかった。発表し終わると寝床についた。

4日目今日が最終日。そしてバスに行って中学校に行った中学校では原発の影響やそこで働く人たちの問題行動など、説明をしてもらった後に中学校を回った。そして回った後に、飛行機に乗る空港に行った。結構な時間が過ぎて苦手な飛行機に乗った。やっぱり飛行機は右に揺れたり左に揺れたり怖かった。1つの飛行機に乗り終わりもう一つの飛行機に乗った。もう一つの飛行機はあまり揺れなかった。そして松山についた。その後、母親と帰宅した。僕は、久しぶりに家に帰ってきた。東北に行ったのは、いい思い出になった。僕は、命が一番大事だと東北に行って学んだ。死んでも仕方がないと思うのではなく、逃げて命を大切にしたいと思った。





防災活動研修で感じたこと

西条市立西条西中学校 2年 伊藤 康将

僕はこの研修を通して、いろんなことを学ぶことができました。わからないことは、被災地の方々と交流させていただいた時に聞くことができ、たくさんを知ることができて、とてもよい勉強になりました。今回の研修を通して、「目で、耳で、肌で、心で」感じたことの中で特に心に残ったことを紹介したいと思います。

まず1つ目は、「閑上の記憶」についてです。ここでは、「閑上の記憶」館の館長さんに、日和山、名取市の慰霊碑を案内していただきました。日和山では、津波のきた所を教えていただきましたが、とても高い所まで津波がきていたことがわかり、驚きました。その後のお話で震災の起こった日は、中学校の卒業式だったことも知りました。その日にあのようなことが起きるとは、誰も思わなかったと思います。話を聞いて、親よりも先に亡くなることはどんなに悲しいことかあらためてわかりました。現在、「閑上の記憶」の入り口の横には中学3年生3名、2年生7名、1年生4名の名前が刻まれています。絶対に忘れてはいけないことだと思います。また、ほかに印象に残っていることは、「死ね」という言葉は絶対に口にしてはいけないということです。生きる喜びを感じ、いま自分たちがこの場に存在できることが、当たり前ではないということを感じながら生活しなければなりません。いろいろな人の支えがあって、楽しく生活できていることに感謝しなければなりません。ひとつの命をしっかり大切にしなければなりません。

2つ目は、気仙小学校元校長先生のお話です。避難するときの判断は、校長先生がするようになっています。そのためにも、冷静でいなければなりません。すばやく高いところに子供たちを避難させることが、一番優先しなければいけないということがわかりました。お話の中で、避難をすると、空腹よりもトイレや寒さに困ることが多いということもわかりました。しかし、一番大切なのは、生きるための工夫だと教えていただきました。経験がないときは、何でもいいから本を読めば、そこから得るものがあることもわかりました。また、地域の行事に参加したり、きちんとしたあいさつをしたりして名前や顔を知ってもらっておくことも重要だとわかりました。

人は誰でも、思いもよらないことが起こることがあります。しかし、それをどのように乗り越えるかが大切だと思いました。震災は防ぐことができませんが、対応の仕方によっては、命は救えます。僕たちも被災地に行かせていただくにあたり、勇気付けないといけないと思っていましたが、反対にとっても元気や勇気をいただきました。みなさんのお話の中でつらい事があっても、少しでも前を向いて進めば必ず良いことがあるとわかりました。

僕は野球部に所属しています。どんなにつらいことや、苦しいことがあっても、あきらめず前を向いて常に笑顔でがんばりたいと思います。今回は、本当にとっても貴重な体験ができました。自分のこれからの人生にこの経験を活かしていきたいと思っています。



初めての被災地ボランティアに参加して

内子町立内子中学校 3年 長 淵 嘉 音



僕は今回の防災活動研修事業で、これから生きていく中で忘れてはいけない事を沢山学ぶことができました。その中でも、僕の心に残っている事は2つあります。

1つ目は、関上地区の見学です。ここには「関上の記憶」という施設があります。施設は、プレハブで出来た小さな建物でびっくりしましたが、その中を見学する事ができました。

施設には、津波が沢山のものを奪っていった記憶がありました。薄れていく過去を現在へ、言葉だけでなく、物や形で語り継いでいて、素晴らしい事だと思いました。僕もテレビで見た当時の状況を思い出しました。被災直後の写真の風景は、今の風景と異なり、そのギャップに「ここは、同じ場所なのか」と少しの間、我が目を疑うほどです。この場所には沢山の住居や工場・店もあったはずで、自分の家や命を含む色々なものが無くなるとは想像できなかったと思います。被災後どんなにショックで悲しかったか…考える事しかできません。今の状況はまだまだ何も無い風景が残っていますが、それでも少しずつ復興している事を知る事ができました。再び、「今この一瞬を大切に生きる。」と、立ち上がろうとする被災地やここに関わっている方々の心の強さに感動しました。そして、僕が大人になったら、もう一度東北に訪れたいです。

2つ目は、どこまでも茶色の土が広がる復興現場が今後どんな風に代わっていくか想像もつかない陸前高田市です。市長、戸羽さんの講話では、戸羽さんは1人の被災者なのに、お話を聞いたりすると、「仲間を大切にし、仲間は多くいた方がいい。」という前向きな言葉が多くあり、僕たちの方が元気をもらいました。「人生は一度きり、何が起きるか分からないので、この一瞬をしっかりと楽しんで、生かされている。」と。僕はそう言っている様に感じました。そして僕は、人間は前を向いて生きていく生き物なんだなと思いました。僕も、戸羽さんのような立派な大人になりたいです。

今回、現地で被災者の方々とお話ができる場を設けていただき、僕は色々な事を知る事ができました。僕が今できる事は、家族・友人・地域の人に伝える事だと思います。愛媛県PTA連合会のみなさんをはじめ、僕たちが防災活動研修事業に参加する為にサポートしていただいた皆さんにとっても感謝しています。ありがとうございました。





自然災害の恐ろしさについて学んだこと

砥部町立砥部中学校 2年 阿河 優里

私は、夏休みに愛媛県PTA連合会主催の防災活動事業に参加しました。なぜこの事業に参加したかと言うと被災地の現状について自分の目で見て感じたかったからです。私は、3泊4日の日程で宮城県のみどり、岩手県の陸前高田市、福島県の南相馬市を訪問しました。この4日間の中で心に残ったことについて述べたいと思います。宮城県のみどりに行った時は、自分の住んでいる土地で昔どんな災害が起きていたか学ぶ事が大切だと思いました。みどりには、以前から何回も大津波が来ていたそうです。みどりには、ずっと昔から津波が来たという記録が残されていたにもかかわらずみどりの人達は、そのような事が自分達の住んでいる土地であったとは考えもしなかったそうです。この話を聞いて四国にも何回トラフ大地震が来ると言われているけれど私自身地震が30年以内に来るといふ事実しか知らないと考えました。また、自分の住んで居る地域に昔どんな災害がどれくらいの規模できたのかを、調べておくことが大事だと思いました。「津波はみどりにはこない」という誤った情報が、みどり全体に流れてしまい、それを信じていたからだと思いました。これを聞いて、今ある情報が本当に正確か、いくら昔は災害は起きていなくても、現代になると災害が起きるかもしれないと考えておくことが大切だと思いました。それを怠った結果、この様にたくさんの方が亡くなったのではないかと考えました。

次に岩手県陸前高田市に行き、いろいろな方の講話を聞いたり、復興現場の最前線を見たりしました。その中でも特に米崎中学校の仮設住宅の事が心に残りました。陸前高田市は震災までは岩手県の中ではかなり大きい市でしたが、私が見た風景は何もなくダンプカーや工事の車が走っており「本当にそんなに大きな都市だったのかな」と思いました。どんなに立派な建造物が建っている街でも災害には勝てないのかなと思いました。津波が街を飲み込んだ瞬間ってどれくらい恐ろしかったのかなと思いました。また、米崎中学校ではグラウンドにびっしりと仮設住宅が建っており、中学生が部活の出来る様な場所はありませんでした。私たち「暑い暑い」とはいえ毎日やりたい部活をやり、思う存分プレーをしたり、他校と練習試合ができる事は同じ中学生として自分たちは恵まれているなと思いました。

最後にもう1つ述べたい事があります。それは、福島市南相馬市に行った時のことです。元々南相馬市は、平成18年に原町市と小高町及び鹿島町が合併して誕生しました。しかし原発にほど近い南相馬市は原発と地震の影響で多くの方が避難せざるを得ませんでした。私が仲良くなった友だちの中に伊方出身の子がいました。その子の話では「原発が爆発すると自分たちの家は住めなくなるかもしれない」と言っていました。私はその話を聞き、もしも自分の身近な所で原発が爆発すると人々はどうなるのかな？と思いました。実際私の行った鹿島中学校では、給食のお米は全て地元の南相馬市のものではなく、遠く離れた新潟県産のものでいちごやアスパラガス、ミニトマトは県産産のものを食べているそうです。私はこの話を聞いて、砥部では地産地消を推奨しており、地元でとれたキウイや野菜や梅など多くのものを新鮮な状態ですぐに調理し給食でよく出てくるけど、南相馬市の子どもたちはどんな給食を食べているのかなと思いました。

今回の震災について学んだ中で、私は良いところと悪いところの2つを見つけることができました。良いところは避難所などで色々な人が生活することで、震災の前よりも地域全体が仲良くなれた事です。悪いところは色々な物や自然を失ったり、1人1人の自由やプライベートな空間がなくなってしまったことです。また尊い命が一瞬にして失われ、以前より不便になったことの方が多いと感じました。私がこの学習で1番心に残っているのは「自分の命もみんなの命も大切に」という言葉です。この言葉を聞き、自分の命はもちろんの事、他人の命も自然の命も、この世に存在するすべての命を大切にしたいと思いました。いる来るかわからない自然災害についてもう一度自分にできる事を考えていきたいと思いました。





防災活動研修事業について

新居浜市立北中学校 1年 藤田 有城

ぼくがこの防災活動研修事業に参加して学んだことは、地震や津波が来たときには、どのようにしてにげるのか震災後どのような生活をしていくかなどです。今回の活動で、ぼくが一番心に残った活動は「米崎中学校仮設住宅」です。ここで学んだことは、『長いゆれのときは、津波が来る』ということです。強いゆれでも一瞬なら津波は来ません。そして津波が来たら遠くではなくとにかく高い所ににげるのが大切です。津波の大きさは来るまでわかりません。今回の震災では予想を大きく越える津波が来ました。津波は大きければ大きいほど範囲が広がっています。人は遠くに逃げると体力を失って絶対津波にのみ込まれてしまいます。なので、津波が来たときはとにかく高い所ににげなければなりません。ぼくが津波が来たときに一番手元にあってほしいものは何かと聞いたら、連絡がとれるように電話と、情報が欲しいから、ラジオのこの2つが一番手元にあってほしいと言っていました。ぼくが思っていたのは、水と食料（米、麺）だと思っていきましたが、電話とラジオのほうが手元にあってほしかったそうです。また、支援物資は来るのかと思っていきましたが3日ほどで弁当や衣類が来たそうです。

次にぼくが大切だと思った場所は、「閑上の記憶」です。この名取市は、震災にあった中でも最大に近い被害にあった地区です。ここでは、中学校の卒業式の日震災がきてしまって、逃げ遅れた中学生14人が亡くなってしまいました。この中の1人に野球部のエースがいて同じ部の人ベースを置いていました。ぼくも同じ野球をやっている人としてとても感動しました。この中学校の近くの小学校は逃げ遅れず全員が助かりました。この学校の校長先生が「逃げるときは低学年ではなく高学年を一番前にする。」ということでした。低学年だと遅いから全員が逃げ遅れてしまいます。しかし高学年だと、全員を誘導して素早く逃げるができるからです。

また、この日は陸前高田市の復興現場にも行きました。今回復興するときは3メートル埋め立てるそうです。そして有名な「一本松」は陸前高田市以外にも南相馬市という所にもあったそうです。高さは低いけど、立派な松でした。

ぼくが今回この防災研修事業に参加して思ったことは、津波が来た場合には親や兄弟たちが生きてると信じて自分自身が助かるように逃げることです。また、今回の活動で津波のおそろしさが深くわかりました。もし、新居浜に南海トラフが来た場合には、ここで学んだことを思い出して、対処していきたいです。



イメージと現実

東温市立川内中学校 3年 松崎 桃果



東日本大震災から5年が経った今。新聞やニュースでも「復興」という言葉をあまり聞かなくなり、東京五輪に向けた準備がすすめられている日本。そんななかで、「被災地は今、どうなっているのだろうか」という思いを抱きながら、ボランティア活動に参加した。しかし実際は私の想像していた様子とは全然違っていた。

飛行機が着陸態勢に入り、窓からみえる仙台市。私は驚き以外の感情が出てこなかった。仙台市は、地方中枢都市ということもあり、私は華やかな町並みをイメージしていた。しかし、大きく違っていた。広がっている砂地、大きな堤防。そして、大きな建物等のいたるところにある「頑張ろう」の言葉。」日に日に町は復興していくが、元に戻るまでにはまだまだたくさんの時間がかかると聞いた。私達が着陸した仙台空港にも津波がきていたと知った時は本当に驚いた。自分が今、立っている場所に自分の何倍、何十倍の高さの波が上から襲ってくる恐怖。この時、生まれて始めて津波がとても身近にあるものだ実感した。そして、津波への恐ろしさが良く分かった。

私が今回の活動で一番心に残り、焼きついたのは、実際に地震を体験された方の話を聞いたことだ。普段は聞くことの出来ない貴重な時間。その中でも特に、陸前高田市市長さんのお話はとても心に焼きついた。話を聞いている時に、自分の目から涙が出てきた。大切な人を失って、それでも市民のために…と前を向き頑張る市長さん。果して、自分はどうなのだろうとかと考えると、自分がとても情なく思えた。立場や年が違って同じ1人の人間であるのに、自分は自分の事だけ考えていると改めて実感した。そして、「自然災害は防げない。しかし、私達は人の命を救うことができる。」

という言葉にとっても心をうたれました。30年以内にくるといわれている南海トラフ。地震が起こらなければ問題ないが、自然災害を止めることは人間には出来ない。しかし備えておくことで、たくさんの命を救うことが出来るという事である。東日本大震災により犠牲になった尊い命。南海トラフでは犠牲者が出ない様に、私達は東日本大震災から学ばなければならないと思う。

また、当たり前の生活は存在しない事だと教えていただいた。帰る家があること、家族がいて友達がいること、全てが当たり前ではないという事がよく分かった。あらゆることに感謝して生活する事の大切さ。自分の生活態度を見直して、感謝の心を常に持っていられる人になりたいと思った。

もう1人、凄く心に焼きついた方がいる。その方は私に優しく微笑みながら、「津波はマイナスだけでは無いんよ。津波が起こった事でプラスになった事もある。」と私に教えてくれた。正直、意味が分からなかった。たくさんの建物や命を奪った津波にプラスな面などあるはずがないと思った。するとゆっくり教えてくれた。それはとても心温まるものであった。津波で家が流され、仮設住宅で退屈で過ごす日々。その中で、新たな出会いがあり、自分の居場所が出来たという事であった。そして最後に、「過去には戻れないし、時間を戻す事も出来ない。しかし、未来はかえられる。」と教えてくれた。自分が励まされている感じであった。大切な場所や人を失い、私には量りしれない辛さや悲しみが胸の中にあると思う。それでも未来に向かって前向きに生きていく方々。私には無い人間の強さだと思う。私は小さな失敗をただけで過去ばかり振り返り、未来の事など考えていない。そんな自分は凄くちっぽけだと思った。この様な素晴らしい方々と一緒に話せて、私はとても幸せ者だと思う。

今回の活動で学んだたくさんしたこと。人から聞いたり、テレビで見たりするのは大きく違っていた現地。自分の目で見て、聞いて直接感じることで思う様々な考え。そして学んだことをこれからどう伝えるのか。私の頭の中にはまだまだ解決できていないことがたくさんある。被災地に行く前のちっぽけな自分、行った後の考え方が大きく変わった自分。どちらも1人の自分であるが、この4日間で人として大きく成長できたと思う。

人生はいつ終わるか分からない。明日、地震が来るかもしれない。だからこそ私は、明日の事を考える前に、今日、今生きているということを一番に考えて生きていきたい。

そして、1日も被災地が復興されることを心から祈る。人は1人では生きていけない。支え合い、助けあい、励ましあって生きていくから人は輝き、素晴らしいのだと思う。

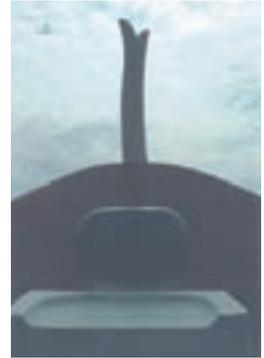


感 謝

西条市立西条北中学校 3年 大 道 紅実花



研修1日目は、宮城県名取市閑上地区に行きました。まず、「閑上の記憶」館の館長さんから、閑上中学校遺族会が建てた慰霊碑についてのお話を聞きました。閑上中学校では14名の方が震災で亡くなりました。その方々のお墓が「閑上の記憶」のすぐ近くにあります。そのお墓はただ拜むだけでなく、触ったり抱いたりされて、いつまでも暖かいものであって欲しいという思いで建てられました。3月11日は閑上中学校の卒業式だった為、当時の3年生は卒業式が命日となってしまいました。自分が受験した高校に受かったかどうかも分からないまま亡くなってしまいました。人の命は儚いものだと改めて感じました。当たり前であった生活が当たり前でなくなるということは本当に恐ろしい事だと思いました。閑上には「名取市の慰霊碑」というものがあります。右の写真です。これは、何もなくなった大地から新芽が出て来たというイメージで建てられました。その横にある石には震災で亡くなられた方々の名前がずらりと並んでいます。復興がもう少し進めば、1人1つの石に名前が書かれるそうです。閑上では鳩風船という物が飛ばされました。白い鳩風船には亡くなった方へのメッセージが書かれています。その鳩風船を飛ばしている所の映像では、「卒業おめでとう。」「閑上祈復興」などが書かれていました。思いはちゃんと天国に届いて欲しいです。



次に、陸前高田市に行きました。陸前高田市には“奇跡の一本松”という、復興のシンボルがあります。日本百景「高田松原」に70,000本あった松が、津波で倒されました。そんな中、1本だけ倒れなかった松のことです。この松の木は既に枯れていますが、たくさんの人達から寄付を貰って、今も残っています。奇跡の一本松は、すごく高くまっすぐに伸びていて被災した人達を励ましている様に見えました。後ろに見えている建物は、被災したホテルです。津波の恐ろしさを忘れない様に、残されています。陸前高田市の戸羽市長さんからの話も聞きました。陸前高田市では、予想を上回る大きな津波が来て、避難場所が被災した為、たくさんの死者が出たそうです。危険だと判断し、もっと高くへ避難した人もいれば、「ここは避難場所だから大丈夫。」と決め付け、避難場所に残った人もいました。たった1つの判断が生死を分けるのはすごく恐ろしい事だと思いました。避難場所に着いても、決して助かったわけではありません。もしもの事を想定しなければならないことを知りました。



研修2日目は、岩手県陸前高田市立米崎中学校仮設住宅に行きました。仮設の人達は、すごく明るく、地方の伝統的な踊りで私達を迎えて下さいました。すごく楽しそうな表情でしたが、3.11の話になるとすぐに暗い表情になってしまいました。皆さんの話の中で一番印象的だったのは、山の上に避難して町を見下ろすと、家や人が津波に流されているのが見えた。人が死んで町が壊れていくのをただ見ている事しか出来ないのがすごく悔しかった、という話でした。悪い夢であって欲しかったと、皆さんが口を揃えて言っていました。その時は怖さと寒さで震えが止まらず、恐ろしすぎて涙も出なかったそうです。避難所の生活では、明日の事よりも今日を生き延びることが精一杯で、そんな生活に耐えきれず、自殺する人も多かったそうです。でも、震災は、マイナスな事ばかりではなかったとおっしゃいました。たしかに、つらい事はたくさんあったんだけど、全国からたくさんの支援を貰ったり、たくさんの良い人達にも出会えた。仮設で励まし、励まされて人間の素晴らしさを感じたそうです。何事も前向きにならなければ前には進まないんだと改めて思いました。

私は4日間の研修で大切なことをたくさん学びました。「命を大切にする」これは、当たり前の事ですけどすごく大事なことです。「人との関わり」これは、色んな人と関わって自分の存在を知ってもらうという事です。震災による孤独死が無くなります。地域のイベントの参加や近所の人への挨拶が大事だと知りました。もっともっと学んだ事はあります。私が勉強できたのはPTA連合会の皆さんや、3.11の事を教えてくれた方々、私が参加する為に色々手伝ってくれた親のお陰です。感謝の気持ちと、学んで来た事を忘れずに、今、自分は生きているのではなく生かされているんだという事を胸に、生きて行こうと思います。



防災活動研修に参加して

松山市立南中学校 2年 武田 空

私がこの研修に参加したいと思ったのは、震災がおきたとき、私は小学2年生でした。テレビから流れてくる津波の映像を見て、「怖い」と思ったのと、避難している方々を見て「何か少しでも力になれることはないのかな」と小さいながら強烈に感じたことを今でも覚えていたからでした。

名取市閑上地区を訪問した時、景色を見た瞬間何も言葉が出てこなくて、改めて津波の恐ろしさを肌で感じました。閑上地区の方々のお話の中で、「津波が日和山を越えた」「当時は、家や大型バスがたくさん転がっていた」と聞いたときは本当に驚きました。「閑上メモリーズ」では、亡くなられた中学生の遺品や名前の彫られた石碑を見学しました。ここで被害に遭われたのは、今の私と同じくらいの年齢のみなさんです。「卒業式の日が命日になってしまった」と聞いた時にはこみあげてくるものがありました。そして、「みんな、命を粗末にしたらダメだよ。絶対に、何があっても、親より先に死んだらいかん!!」と言われました。私は、この言葉がとても心に突き刺さりました。

その後、一般の人は立ち入り禁止区域になっている復興現場最前線を見学しました。とても広大な場所に大きなトラックなどの重機しかなかったことにとっても驚きました。復興現場の面積は、「東京ディズニーリゾート2個分」と聞き、被害の大きさに圧倒されました。この場所は、あの日津波が来るまでは、たくさんの人が暮らす賑やかな活気あふれる街だったんだろうなと思いました。

「今年から来年にかけて、図書館やスーパーの建設がはじまる」と聞き、1日でも早く復興できればいいなと思いました。

復興現場や、被災地見学の途中、気仙大工左官伝承館で陸前高田銘菓の「ゆべし」作り体験もしました。「ゆべし」にはいろいろな形、味があるそうなのですが、私たちは「つばきゆべし」を作りました。米粉と砂糖と水をねって形を整え蒸したお菓子です。愛媛にも「ゆべし」がありますが、愛媛のゆべしは、お菓子というより珍味のような「ゆべし」です。柚子の実の上部を切り取った後、中身をくりぬいて、この中に味噌、山椒、くるみなどを詰めて、切り取った上部でふたをします。そして、これを蒸して、干したものです。陸前高田の「ゆべし」は、柚子の産地から距離があり材料として使われにくかったため、材料として入手しやすかったくるみを入れたお菓子となったそうです。江戸時代以前は、くるみは貴重な蛋白源と脂肪分だったので、東北地方での伝統のお菓子となったようです。「ゆべし」を自分たちで作ったあとは、抹茶をたてていただいて、みんなで食べました。もちもちとしていて、和菓子好きの私はとてもおいしくいただきました。伝統文化をとても大切にしている東北の方々の姿に、私も愛媛の伝統文化をもっと知り、受け継いでいかなければいけないなと思いました。

陸前高田市では、戸羽市長さんのお話を伺いました。市長さんは、震災当時あまりにも多くの犠牲者が出て、尋常ではない被害の大きさに一時は「この仕事を辞めたい」と思ったと言われていました。しかし、「今辞めては復興の責任者として恥ずかしいことだ」と思いとどまったとおっしゃっていました。市長さんは、津波で奥さんを亡くされ、ともに仕事をしていた役場の職員の方もたくさん亡くなられたといわれました。ご自身もとてもつらい立場にしながら復興の責任者として気持を奮い立たせた市長さんをとても素晴らしい方だと思いました。私も、市長さんのような大人になりたいと思いました。

宿泊先のホテルでは、元陸前高田気仙小学校の校長先生に命についてのお話をさせていただきました。震災当時、学校が避難場所となったそうなのですが、その避難所で高学年の生徒が率先して行動し、避難所の方々に助けていたと聞き、私が同じ立場になった時にも同じように行動できるかなと考えさせられました。校長先生の言葉でとても心に残っている言葉が「誰も命も大切に」という言葉です。「大きな災害などが起こった時には、あの人が嫌いだからいやだというようなことは決して思っはいけない、人の命に好き嫌いは関係ない」と言われていました。本当にその通りだなと思いました。どんな時でもお互いに思いやる気持ちを大切にしなければいけないと改めて痛感しました。

米崎中学校に向かう途中、1軒のきれいな住宅がありました。その住宅は、新築したばかりの時に震災が起り、地震、津波の被害は何も受けなかったそうですが、そこに住むご家族4人の方全員が亡くなられたそうです。庭の片隅に、ご家族の笑顔の石碑がありました。私も4人家族ですが、その石碑を目にしたとき、とても胸が締め付けられる思いがしました。

その後、米崎中学校の仮設住宅に向かいました。こちらで、被災者の方々にいろいろとお話を伺ったのですが、私が一番驚いたことは、仮設住宅に住まわれている方々がこちらが逆に元気をもらうくらいとても元気で優しく接してくださったことです。辛いこと、大変なことがまだまだたくさんあると思うのに、とても

明るくにこやかに私たちに接してくれて本当にみなさん素敵なお方ばかりだなと思いました。震災当時は、「いろいろな国の自衛隊や軍隊、救助隊の人たちが国境を越えてたくさん来てくれた。とてもありがたかった。」と話してくださいました。私がお話を伺った方は、昔高校の英語の先生をされていた方でした。とても明るく元気いっぱいの方でしたが、震災で、たくさんの教え子の方も亡くなられて、とても辛い思いをたくさんしたそうです。仮設住宅のみなさんから、命の大切さ、防災の必要性、そして、震災での教訓をたくさん教えていただきました。「この町が復興したら何がしたいですか？」と質問をしたら、「庭を造り1日も早く安心して暮らせる町に戻れたらいいなと思いました。」

高田松原跡地の奇跡の一本松も見学しました。太平洋につながる広田湾に面した高田松原は、350年にわたって植林されてきた約7万本の松の木が茂り、陸中海岸区立公園や日本百景にも指定されていた景勝地でしたが、震災による津波の直撃を受け、ほとんどの松の木がなぎ倒されて壊滅したそうです。しかし、松原の西端近くに立っていた一本の松が津波に耐えて、立ったままの状態が残ったことから、甚大な被害をもたらした中であって、この松の木は震災からの復興への希望を象徴するものとして、「奇跡の一本松」や「希望の松」と呼ばれるようになったそうです。震災後は、この木を保護する活動が続けられていたのですが、根が腐ってしまったため、この木を復興を象徴するモニュメントとして残すこととなり、幹を防腐処理して心棒を入れて木を補強して、枝や葉は複製したものに付け替えるなどの保存作業を行い、元の場所に再びたてられたそうです。複製された松の木ですが、私はとても力強さを感じました。きっと被災地の方たちにも勇気をあたえてくれていると思います。

一本松から中尊寺に行く途中で、震災当時のまま残っているマンションがありました。5階建てのマンションだったのですが、4階まで津波の被害に遭ったそうです。津波の高さをまざまざとみせつけられ、バスの中で震えが止まりませんでした。移動するバスの中からは、まだまだ震災当時のままの場所などがたくさん目に留まりました。復興現場最前線などを見学して、少しずつですが確実に復興はしているようですが、完全に復興するまでには気の遠くなるくらいの時間が必要なかもしれないと思いました。私たちもその復興に少しでも力を注げればと思いました。

世界遺産、中尊寺も訪問しました。研修に参加する以前から行ってみたいところだったので、とても興奮しました。中尊寺は900年も前から平和、安らぎのために作られたそうです。金色堂の中は、とても広くて驚きました。金色の3体の仏像が並んであり、その姿はとても神秘的で、とても圧巻でした。金色堂をでて、左に進んだところに松尾芭蕉の像がありました。

「夏草や兵どもが夢のあと」

松尾芭蕉がこの地で詠んだ句です。私は才能がないので、句のことはよくわかりませんが、この地で改めてこの句をよむと、なんとなくぐっとくるものがありました。

南相馬市立鹿島中学校では、校長先生のお話を伺い、仮設校舎を見学させていただきました。

鹿島中学校で近隣の4校の小学校が同じ施設を共有していました。どんな時でも学校、勉強は欠かせないものだと思います。普段、私たちはいろいろと学校のことで不平、不満を何気なく口にしたりしていることがありますが、この仮設校舎を見学させていただいて、とても贅沢な学校生活を送っているんだなと思いました。そして、勉強できる環境が当たり前にある日常に、とてもありがたいことなんだと痛感しました。校長先生のお話の中で、震災後に福島第一原発近くの高速道路で、バスの転落事故があったそうです。普通なら、すぐに救助活動がおこなわれ、ケガ人の収容や搬送、バスの引き揚げ作業にとりかかるとは思いますが、福島第一原発での放射能汚染のために、すぐに救助することができず、とても大変だったという話を聞きました。原発事故のために、通常では考えられないことがいまでも福島では起きているのだと知り、原発事故の恐ろしさをひしひしと感じました。そんな大変な状況の中、生徒のみなさんが仮設校舎のためにいろいろと不自由なことがある中で、とても元気いっぱい、笑顔があふれる学校生活を送られているとお聞きして、自分たちの日々を反省し、また、この経験をこれからの生活でどんどんと生かしていかなければいけないと思いました。

ともに研修に参加した仲間と、報告会の資料を作成し、それぞれの班で発表も行いました。みんなそれぞれ、とても貴重な体験をしたという思いがギュッと詰まった発表だったと思います。今回の研修で経験したことを、家族や友人と共有し、自分たちが率先して行動を起こすことがとても大切だなと思いました。被災地のことを風化させないように、私たち世代が次の世代へと伝えていく架け橋となれるように、また、命の大切さをいろいろな場面で伝えていこうと思いました。

最初は少し不安だった今回の研修ですが、たくさんの方々の貴重なお話を伺うたびに、私でも何かできることがあるのかもしれない、少しの勇気で一歩踏み出すことができたなら、さらにできることが広がっていくのかもしれないと参加してみたいと思いました。この経験を忘れず、これからの人生にも生かしていこうと思います。

とても貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。





東北ボランティア活動に参加して

新居浜市立川東中学校 1年 正田 遥香

私は、今回、初めて、東日本大震災の被災地に行きました。被災地を訪れる前に、この地震で何がおこり、そして、どうなったのかについて調べました。調べてわかったことは、この東日本大震災では、大津波がおこり、多大な被害をうけたこと、そして、たくさんの人の命が奪われてしまったことがわかりました。「津波」という言葉は、今までに何度も聞いたことはありますが、実際に自分が経験したことはありません。これだけの大きな被害があったということは、誰も予想できないほどの、ものすごい津波が押し寄せたんだと思いました。

2年前、青森から東京へ向かう飛行機から、海岸線に沿ってずっと続く白い壁を見ました。家族から防潮堤だと聞きました。その防潮堤から陸の方を見ると、建物がほとんどなく、空き地のような感じでした。その時「津波の被害にあった場所かもしれない。」そう思った記憶があります。今回の活動で、実際に防潮堤を見ました。見上げなければならぬほどの高さがあり、びっくりしました。私の住んでいる新居浜市の海岸にも防波堤はあります。しかし、比べものにならないほどの高さです。そんな防潮堤の高さほどの津波が押し寄せてきたのだと知り、大津波の脅威を感じました。

また、陸前高田市で奇跡の一本松を見ました。テレビで見たことはありましたが、本当に1本だけが残っていました。この一本松の周辺には、約70,000本の松の木があったそうです。しかし、大津波によって倒され、たった1本だけが残ったそうです。津波のすごさを改めて実感しました。

この大震災で、私と同じ中学生が、犠牲になってしまったと言う話も聞きました。この3月11日は中学校の卒業式だったそうです。「卒業の日が悲しい日になってしまうやなんて。」話を聞いた時、涙があふれそうになりました。まだまだやりたいことや、将来の夢もあったと思います。まだ、家族のもとへ帰れていない方もいるそうです。「早く家族に合わせてあげたい。」そう私は心の中で叫びました。

「復興」という言葉をよく耳にします。しかし、被災地に行ってみて「人が多く集まる都市部は、建物が立ち、大震災の前とほぼ同じような景色にもどっているようですが、都市部から少し離れた地域では、建物もなく、空き地のような場所が広がり、人が生活するには難しそう。」という印象を受けました大震災から5年が経ちますが、もとの生活に戻るには、まだまだ時間がかかりそうだと感じました。

日本は、地震の多い国です。いつどこで地震がおこすかわかりません。近い将来、南海トラフ巨大地震がくるかもしれません。もし、巨大地震がおこった場合、瀬戸内海側でも津波が発生する可能性はあります。私が住んでいる地域は、津波が押し寄せてくる危険のある地域です。日頃から、家族と相談し、避難場所をきちんと決めておきたいと思います。そして、家族が心配だからといって、探しに行くことはせず。避難場所を離れないようにしようと思います。

最後に、普段、なかなか会うことのできない愛媛県内の中学生のみんなと、交流ができてよかったです。今でも連絡を取り合い、情報交換しています。今回のボランティア活動で学んだことを共有し、防災活動にいかせたらと思います。



東日本大震災被災地レポート

松野町立松野中学校 2年 友 康 士 郎



1日目、名取市閑上地区に行った。僕は、その光景に息をのんだ。辺りには高いビルや、お店も何もなかった。ただ、点々と建物があるだけ。その一つが、「閑上の記憶」だ。館内では、当時の記憶が写真等で語られていた。3月11日の閑上地区の様子をビデオで見た。見るのが耐えられないような、何とも言えない映像だった。家が流されたり、漁船が乗り上げたり、津波はほんとうに何もかも流していくんだなと思った。外には、閑上中学校の生徒の慰霊碑があった。自分たちと同じ中学生が14人も亡くなっていて、悲しい気持ちになった。しかも、震災当日が卒業式だったと知り、地震が起きるとしても、1日あとだったら良かったんじゃないかな、とよけいに悲しくなった。

午後には、陸前高田市に行った。見た瞬間「復興はまだまだだ」と思った。堤防はほとんど完成しているようだったが、住宅はできていなかった。でも、かさ上げ工事は止まることなく進んでいた。かさ上げ工事のためにとっても大きなダンプカーを組み立てたと聞き、これで復興が早まるなと思った。この後、陸前高田市の庁舎に行って、市長さんの講演を聞いた。市長さんは、責任感が強いと思った。なぜなら、震災が起きても、市に残っていたからだ。僕だったらほかの地域に逃げたと思う。市民の皆さんを思っていたから、残っていたんだなと思う。1日目は、震災を思い出す日になった。

2日目、仮設住宅に行き東日本大震災の実体験を聞いた。僕が話を聞いたおばあさんは当時、泣く力がなく、震えが止まらなかったそうだ。長い地震が来たら避難する。避難するときは、遠くへ遠くへ、ではなく、高いところへ避難するといいと語ってくれた。僕は、その言葉を心に深くとめた。震災が起きてから最初の物資が届いたのは、3日後だったそうだ。一般の方からの物資は、1週間以上たってから届いた。3日間分の食料や飲料水があると聞いていたけど、多分足りないと思った。家で非常用持出袋の中身を確認し、家族と震災の時の備えについて話し合いたいと思った。その後は、中尊寺に行き、復興祈願をした。1日でも早く復興してほしいと現地を実際に見て思った。

3日目、南相馬市の鹿島中学校を訪れた。玄関の前に放射線を測る機械のようなものがあり、毎日確認しているのかなと思った。あまり時間がなくて見られなかったけど、仮設の校舎からは、寂しいような感じがした。

この事業を通して、「自分の命は自分で守る」という言葉をたくさん耳にしてきた。日頃の生活では、人の優しさを忘れず、思いやりを持って生活したいと思った。

近々、愛媛でも大地震が起きるといわれている。僕は自分の命を自分で守り、この1分1秒をしっかりと、大切に生きていきたい。





復興の現状を見て

松山市立椿中学校 1年 本田 麻琳

私は、1学期に国語の授業で東日本大震災のことを学びました。宮城県女川町の被害の様子でした。そこは、14 mを超える津波が襲い、市役所（3階建て）の屋上に避難した人たちはどうにか助かったものの、海から100 mほど離れたところにあった七十七銀行の屋上に避難した人たちは高さ約10 mの津波に飲み込まれて命を落としてしまった場所でした。

そのことをきっかけに、東日本大震災のことを少し思い出してみたら、ちょうど小学1年生の終わりでした。東北で大きな地震があったので募金をしようということになって、募金を持って行ったことくらいしか覚えていませんでした。そのときは、宮城県や岩手県がどの辺りにあるのかもあまりわかっていませんでした。だから、あまり身近なこととして考えられませんでした。

この研修事業の話聞いたとき、「ボランティア活動だけど、自分にできることなんかあるのだろうか。大丈夫かな。」と、思いました。でも、ちょうど学校で習ったばかりだったこともあり、東北大震災とは、どんなものだったのか、その後、どんなふうになっているのか、現状を自分の目で見て、確かめたいと思って参加しました。そこで、行く前にもう一度東日本大震災のことをインターネットなどで調べました。

そして、研修2日目、インターネットで見た「閑上の記憶」や陸前高田の街へ行きました。そこで、私が感じたことは「まだまだ復興は進んでいないな。」ということでした。確かに、震災直後の写真と比べると、がれきはきれいになくなって道路も整備されていました。でも、津波に流されて骨組みだけしか残っていない壊れた建物などは、今も残されたままです。また、県外や海外へ避難して行った人たちは、帰ってきていなくて土地だけが残ったままになっているそうです。

その場所へ連れて行ってもらいました。すると工事中でした。どこから見ても何もない状態で、一部壊れた建物が一つだけありました。今までに見たこともない情景で、驚きました。そこがこれから、住宅地になっていくということです。街の人たちは、そこがこれからできる街の中心地になって欲しいと願っていました。私は、にぎやかな街になって欲しいなと思いました。みんなが元気に楽しく暮らせる街になっていくといいなと思いました。

その後、戸羽市長さんのお話や元・気仙小学校長先生のお話を聞いていると、「自然の災害だからしょうがない。」と思っていた私の考えは、少し間違っていると思いました。「みんなが想像していたよりはるかに高い津波が来た」けれど、その前に「津波なんか来ないよ。」「来ても急いで逃げれば大丈夫だよ。」と、いうように防災の意識が低かったと言われていました。非常持ち出し袋を持っている人も3%くらいのご家庭だったようです。私の家にも非常持ち出し袋があるかどうか、私は知りません。私も心の中で、「大丈夫。私がしなくても。」と、思っていました。しかし、津波でなくてもどんな災害でも、いつ来ても大丈夫なようにすることが大切だということに気づきました。

ボランティアとしての活動は十分ではなかったかもしれませんが、東日本大震災後の現状を見ることができたことは、私にとってとても良かったと思います。





防災活動研修事業を終え

実行委員長 渡邊 誠 一

愛媛の中学生たちにも東北の被災地を見せてあげたい。

その若き目で見、空気に触れ、言葉で響く、その全てを心に刻み持って帰ってほしいと思い、この事業に取り組みました。

今の日本の分岐点の一つでもある東日本大震災、学ぶべきものは多く、「生かされていることの実感」を主に防災、伝承、日常そして復興、を学ぶ事業を行うことができました。被災者の方は口を揃えて言う言葉があります。「忘れないでください」。この言葉こそ我々が伝える源と考えます。被災地の方は、思い出して涙を浮かべる方もいらっしゃいましたが、その時間のほとんどを笑顔で対応していただきました。明るく笑顔、でも悲しさが見え隠れしている空気を感じ取った生徒は多いと思います。

閑上地区にて初めて被災地を感じ、陸前高田市で復興最前線、伝承を学ぶゆべし菓子の製作、市長講演と一つの行事を行うたびに生徒たちの目や行動が変化しているのが感じ取れました。

米崎中仮設住宅では現役生徒を交え、住民の皆様に貴重な話をいただきました。とても明るく前を向いて歩んでいる姿は、生徒たちはどう感じたのでしょうか。被災地を訪れたり、話を聞いたり、時間を重ねる度に生徒たちの行動を変えていきました。

事業3日目の報告会では伝えようとする生徒の気持ちが現れました。無限に吸収することが出来る生徒たち、3日前と別人に思える生徒も居ました。

最終日は南相馬市の中学校を訪問し、校長先生から貴重なお話をいただきました。原発問題で中学校の中に小学校が4校あり、共同で学んでいる場所です。校長先生の話の中で「学業は欠かせない」という言葉がありました、この思いが今を支え様々な試練を乗り越えてきた原動力と感じました。

すべての行事を終え、参加者全員無事事業を終えることが出来ました。お世話になった皆様、生徒たちを送り出していただいた保護者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。御同行いただいたスタッフの皆様、お疲れ様でした。この事業のため御尽力いただきました皆様、本当にありがとうございました。公益社団法人日本PTA全国協議会、愛媛県教育委員会、並びに愛媛県小中学校長会様のご支援、本当ありがとうございました。個の学びを無駄にすることなく生徒たちは明日へと前を見、防災の重要性、命とは、を伝えていってくれることでしょう。

この事業は生徒たちの背中を少しだけ押してあげたにすぎません。地域を飛び越え日本、世界中で活躍する人材に育っていくことを願っています。



防災活動研修事業レポート

1班 引率者 行 天 雅 史

防災活動研修事業1班の引率者として参加しました。初めて顔を合わす1班6名の子供たちと緊張の初対面でした。結団式の抱負を聞いたときは、正直大丈夫かなと不安がよぎりました。その不安が解消出来たのは、他の班より非常に遅く最後の夜の「現地报告会」でした。子供たちの成長は、次の通りです。最初は恥ずかしい感じが出てきたが、徐々に意識が変わり真剣に研修していました。最後は少し積極的に行動出来ました。なぜかと考えると、真剣に震災当時の話をして頂く方々のお話子供たちの心を動かしたと思います。特に印象に残るシーンは、陸前高田市戸羽市長の講演です。子供たち全員が背筋を伸ばし、真剣に聞き耳をたてていました。これは、講演の内容もありますが、事前に事務局より、記録用紙と筆記用具の不要を指示することで、記録は出来ないが記憶に残る（残す）講演会となりました。

3泊4日の超ハードな研修を乗り越えたことはあっぱれです。復興現場や体験談を直接聞いて「命の大切さ」「今を全力で生きること」を感じてもらいました。体調不良のハプニングも数件ありましたがスタッフの協力により乗り越えられました。

個人としては、今回の防災研修事業は、計画段階から参加させて頂きました。震災後、初めての東北と言うことで復興状況はテレビや新聞での情報でしたが、防災研修実行委員として、事前に実行委員長からお話を聞かせて頂きましたが、実際に現場を見たり・体験者の話を聞くことの重要性が分かり、震災の現状を愛媛県下に「伝える大切さ」があることを感じました。

新居浜市P連や宇和島市P連の方々の繋がりから、今回の事業が実現したことは、両市P連の強いパイプを感じました。新規の研修として、福島県P連の協力のもと、仮設小中学校（計4校）を視察出来たことは、PTA関係者として、また保護者として福島の学校の現状が分かり、まだまだ支援が必要であると感じています。まずは家族で災害時の集合場所を話し合いました。



防災活動研修事業を経験して

2班 引率者 大 西 祥 一

今まで映像やインタビューでしか知りえなかった東北の地に引率という形で行かせていただき、私たちも実際に見て聞いて感じるという貴重な経験をさせていただきました。行かせていただくにあたり2点確かめてみたいと考えていました。1つ目はその後の防災への考え方、2つ目は仮設住宅の方々は私たちを歓迎してくれるのかという点です。1つ目については、陸前高田市長のご講話の中でヒントをいただきました。訓練をどれだけ重ねても自分自身がいざという時にすぐに動くことができるかが重要であるという事です。危機管理の重要性を再認識しました。2つ目については、みなさんに歓迎していただき心配は杞憂に終わりました。そこではどうしても確かめたいことがあり、仮設住宅の方に「色々聞かれるのは辛くないですか？」と質問させていただきました。その返答は「確かに辛い事もあるが、伝えることができることに感謝しています。来てくれてありがとう。」と予想外でした。自分自身で見て聞いて感じる事の重要性を改めて感じさせられました。

被災された方々は、日常の当たり前が当たり前でなくなってしまった日から、大変辛い思いをされてきているはずですが、しかし、私たちにお話ししていただく言葉は前向きでした。そして生きる勇気、命の大切さについて力強く伝えていただきました。今回被災地に行かせていただき、「当り前の日常に感謝」「今を生きている・その瞬間を大切に」するという普段意識すらない大切なことを改めて意識させられましたし、防災意識についても考え直す機会を与えていただきました。この経験を今後活かしていけるように、まずは身近な家族や地域の方々へ伝えていきたいと思ひます。この度は貴重な経験をさせていただきましたありがとうございます。



防災活動研修事業について

3班 引率者 藤田 優

2011年3月11日14時46分、後に東日本大震災と呼ばれる未曾有の大災害が発生しました。

人間の尊厳や誇りを根底から揺るがしてしまうかのような大地震。今まで築き上げた希望や夢を全て押し流してしまうかのような大津波。

新聞やテレビで伝えられるその惨状は遠く愛媛にいる私には、まるで別世界の出来事のように映りました。

ボランティア団体を通じて支援物資の供給や年間を通しての募金活動などに参加した私は翌年、視察という名目で岩手県宮古市を訪れました。基礎しか残っていない住宅地。瓦礫処理場にはねじ切れた車両が何百台と積み上げられていました。忙しい作業の合間に案内をしてくださった係の方の憔悴した表情を見て、スーツ姿にヘルメットをかぶりただただ啞然と現地を見て歩く自分に違和感を感じたのを覚えています。

震災から5年と5か月、愛媛県の中学生の引率者として再び東北の地に訪れる機会をいただきました。4年ぶりに見た東北の町はかつての瓦礫や押し流された住宅跡地が姿を消し、整備された土地や新たな住宅地が立ち並んでいる風景もたくさん見られ、復興は大きく前進しているように感じられました。しかし未だに仮設住宅での暮らしを余儀なくされる方々、震災前の教育環境が整わず身を寄せ合うような複式学級での学習。食べ物に含まれる放射性物質への不安。本当の意味の復興はまだまだ終わっていませんでした。

被災地の方々は何度も「忘れないでほしい」「教訓にしてほしい」と繰り返し子どもたちに伝えてくれました。私たちのこれからの使命は、「決して風化させてはならないこと」「東北の皆さんが教えてくれたことを自分のまちに伝えていくこと」だと確信しました。



忘れてはいけない！！

4班 引率者 高田 智世

○「生きてくても 生きられなかった人」のために

○一人でも多くの命を守る為に

○同じ事をくり返してはいけないという思いから、つらくて悲しく残酷だった被災の話してくださっています。伝える事の大切さを知りました。

5年の月日は怖いもので、東日本大震災の記憶と関心が薄れてきていました。申し訳のない気持ちを、目で見たり耳で聞いた事、心で感じた事を一人でも多くの方に伝えていこうと思いました。忘れられないように、子供達がいたから明るさ・元気・勇気を頂いたという話を聞き、今こうしてPTA活動で子供達とつながっていることは幸せな事だと改めて感じました。子供達の明るく輝く笑顔のために、今を1分1秒を命を大切に生きようと強く思っています。

「生きているのではなく 生かされている」のだから……。



東北での研修を終えて

5班 引率者 井上 香里

私は、今回で東北訪問は二回目になります。前は、子どもたちにも一緒に来て欲しいという思いを強く持っていたので、今回はその願いが叶いました。

初日から、子どもたちの真摯な思いが伝わり、一緒に来ることができて本当に良かったと感じました。今回の活動の中で最も印象的だったのは、仮設住宅でのお話の時です。ひとりの老婦人が、「私は、孫を連れてなければ、逃げようとはせんかったと思う。」「孫のおかげで命が助かったんじゃよ。」と語ってくれました。

前日も、お年寄りが避難場所になくて探しに戻った人がたくさん津波に飲み込まれたと聞きました。お年寄りも、長年の経験か達観なのか、どこのお年寄りも逃げようとはしないようです。私が、昨年東北から戻ってきて、「とにかく早く高いところに逃げてください。」と愛南町で訴えたにもかかわらず、多くの悲観的な反応を感じました。「足手まといだし…」「家と一緒に…」などです。

探しに行くのは、消防団や家族です。菅野校長先生が、津波直後の「見つかった？」と10日後の「見つかった？」の意味が違うの分かりますよね？と私たちに話しかけられました。去年は、消防団の偉い人（ふだんは、和菓子店の恰幅の良い社長さん）から話を聞きました。夏に行方不明者が見つかった時、消防団員が見つけたけれど、消防団員はその状況に耐えられなかった…。本当に大変なんですと泣きながら話す姿に、それまでの社長の面影はありませんでした。

とにかく、早く高いところに逃げることです。その原動力が子どもなのです。子どもが必死で走って逃げれば、大人は後からついて来ます。そして、最も動いてくれにくいお年寄りも動かすことができます。そんな原動力となる子どもが、仮設住宅でのお話を真剣に聞き、自ら率先避難者になると帰りのバスで話してくれました。津波は来るけど、未来は明るいと思える素晴らしい旅でした。子どもたち、ありがとう。



人「心と伝」

6班 引率者 宮崎 恵

私たちに何が出来るのか？そんな問いを持ち東北の地に立った。私なりの答え「命を守る・心を守る・心と備えを伝える」である。

「町がなくなっても、人がいる限り伝える。」すべてを表す言葉だ。

心－「防潮堤は心の中に作る」私にとって防災・減災は、人が集まる事と体験活動でした。南海トラフ地震に備えて活動してきた過去に、これからは心を意識した活動をプラスしようとする。生きていくのではなく生かされている。周りに支えられているという自分の存在を普段は意識していない。「津波がなかったら出会わなかった人がいる」と聞いた。なんて前向きな考え方なんだ！人が人を救い、人と人のつながりが人を支えたんだ。

「人生なんてどこでどうなるか分からない。今頑張れることをやらなければ…。素直に感じよう。」この言葉に力を貰った。生と真つすぐ向き合った人たちの強さと感謝の心にふれ、人の心、自分の心を守っていこうと思えた。

伝－閉上の記憶で、「記憶に支配されるのではなく、記憶を支配する」災害に向き合うことで心を整理する。そんな多くの被災者の方々の願いは、「命を大切に！命を守って欲しい」津波は来ないという思い込みが大きな被害となった。震災は防げないが、対応は出来るのだと。では、どうすればよい？知らなければならない。繰り返さないように知り備えることだ。これを伝えることができるのも人なのだ。だから、目を背けず、伝えたい。

子ども達もまた、今回の出会いが気持ちに変化をもたらし、防災意識が向上したように思える。地域の子も達にも学びを…地域での防災活動に「心と伝」今すぐ活かす！

最後に、この事業を形にしてくださった実行委員の皆様、事務局に心より感謝致します。



「つながる」ということ

愛媛県PTA連合会 事務局 原田 幸夫

今年度、初めて愛媛県PTA連合会主催で実施した「防災活動研修事業～あふれる愛顔でつなごう ボランティア活動事業～」に、愛媛県内の中学生32名と愛媛県PTA連合会役員を中心とした12名の大人が参加しました。3泊4日の東北、正に、「寝食を共にして」の研修事業でした。同じものを見て、聴いて、そして、肌で感じてきた3泊4日。しかし、研修事業を終えての「思い」は、参加者一人ひとり違うはずですが、違って当然です。私が抱いた「思い」は、「つながる」ということです。私は、今回の研修事業で、本当に多くの方々と「つながる」ことができたと思います。参加者の皆さん、そのご家族。「閑上の記憶」館の小齋館長さん、陸前高田市の戸羽市長さん、元・気仙小学校の菅野先生、マルゴト陸前高田の松本さん、米崎中学校仮設住宅自治会の皆さん…、そして、今回の研修事業を陰で支えて下さった方々と、挙げればきりがありません。この研修事業がなければ、ひょっとすると出会うことがなかったかもしれません。

愛媛県内から参加した中学生の皆さん、この「つながり」を大事に、そして、この「つながり」をもっともっと広げてほしいと思います。私たちは一人で生きているわけではありません。「生かされている」、多くの人とつながって、私たちは生かされています。

私は、この研修事業で、「つながる」ことのありがたさ、大切さを再考することができました。本当にありがとうございました。



防災意識を高め生命を大切にするPTA活動

愛媛県PTA連合会 事務局 東野 博子

今年度県PTA連合会主催事業として、5月29日の定期総会で実施が承認され、県PTA役員による短期間での計画準備と、日本PTA全国協議会のご支援と郡市PTA連合会のご協力により、76名の応募をいただき、32名の生徒・県PTA役員・看護師とともに参加させていただき深く感謝申し上げます。

県PTA基本方針として、◎子どもたちの健全育成を図るためのPTA活動◎安心・安全な生活環境条件の整備・充実に努めるPTA活動◎防災意識を高め、生命を大切にするPTA活動があります。また、親子安全互助会の目標として、～ひとりには みんなのために みんなはひとりのために～健康・安全教育の普及振興一が掲げられており、今回の防災活動研修事業になったものです。

内陸部は、整備されておりましたが、海岸沿いの地域は、大型車両がひっきりなしに走り復興事業は続いています。炎天下の中、生徒たちが仮設住宅の方や小中学校の先生方の話を真剣に聞き学び元気に活動している姿に感動し 私も励まされ元気をもらうことができました。今回の防災活動で学んだことを、今後おこりうる南海トラフ地震等災害に備え、地域の防災リーダーに育ててくれることを願っています。

事業実施にあたり、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げますとともに、今後も学校・地域とともに、防災意識の向上を図り、被災地支援活動を継続していけるようご指導の程お願いいたします。

ご後援・ご協力いただいた皆様（敬称略）

ご後援いただいた皆様

愛媛県教育委員会

愛媛県小中学校長会

ご協力いただいた皆様

公益社団法人日本PTA全国協議会

一般社団法人岩手県PTA連合会

福島県PTA連合会

相馬地方PTA連絡協議会

認定NPO法人「地球のステージ」事務局「閑上の記憶」

一般社団法人マルゴト陸前高田

陸前高田市

菅野 祥一郎

旧米崎中学校仮設住宅自治会

南相馬市立鹿島中学校

※この活動は、『日本PTA心のきずな61教育支援基金』事業です。

本事業の様子は、下記のホームページにも掲載しております。

<http://www.ehimepta.jp/>

平成28年度
愛媛県PTA連合会 防災活動研修事業

あふれる愛顔でつながろう ボランティア活動事業 報告文集

発行 愛媛県PTA連合会

印刷 有限会社 ウエストコピー

平成28年12月1日発行